

花巻市博物館

研究紀要

—第13号—

目次

- 享保後期（1727-1736）盛岡藩領における火災に関する基礎的考察
……………小田桐睦弥（3）
- 東和ふるさと歴史資料館所蔵「成島毘沙門堂資料」について
江戸時代の漁業・成島和紙に関する文書を中心に ……………因幡 敬宏（13）
- 「Hanamaki」に関する国立国会図書館資料について ……………布臺 一郎（19）
- 八重樫豊澤作品の制作年代の考察 — 落款と印章から — ……小原 伸博（23）

平成30（2018）年3月

序

花巻市博物館は、平成16年の開館以来、地域における社会教育機関として、資料収集及び保管、調査研究、展示、教育普及の活動を行ってまいりました。これらの活動は、ひろく教育・学術および文化の発展に貢献するものでありますが、とりわけ調査研究活動は、他の活動の基盤となるものであります。

本研究紀要には、歴史分野3編、美術工芸1編の論考を収録いたしました。いずれも、他の活動に従事している中でまとめたものであり、必ずしも十分とはいえませんが、今後とも調査研究活動の一層の充実を図り、地域文化の向上と発展に役立つよう努力してまいりたいと考えております。

最後に、ご協力をいただきました皆様に対し厚く御礼申し上げますとともに、真摯なご批判と一層のご指導・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成30年3月

花巻市博物館

館長 高橋 信雄

享保後期（1727 - 1736）盛岡藩領における 火災に関する基礎的考察

小田桐 睦 弥

はじめに

南部領における火災について、本稿では、「享保前期盛岡藩領における火災に関する基礎的考察」に引き続き、後期の盛岡藩領における火災について述べることとする。

なお、基礎資料として使用している、『盛岡藩雑書』は、享保11年（1726）分を欠いているため、それを区切りに前・後期と分けることとした。

享保21年（1736）は、4月28日に元文に改号しているが、データ分析の便利から、この年の末までを享保21年として扱った。

1. 享保前期の盛岡藩

享保後期は7代藩主・南部利視（1708-1752）治世の初期にあたる。利視は5代藩主であった父・信恩の死後に生まれたため、叔父の利幹が6代藩主となった。享保10年（1725）7月21日、叔父利幹の末期養子として、家督を継いで藩主となった。28日には将軍・徳川吉宗にお目見えしている。

利視は藩主の就任当時、まだ18歳で、家老・中野光康（吉兵衛）に藩政を委ねた。しかし、中野は前藩主時代の儉約政策を破棄して旧制度を復活させたため、翌年には参勤交代の下向の費用に窮する事態となった。なお、利視は「頗る遊狩を好み、普く領内を巡視せるを以て、能く風俗を諳じ民情」に通じていたという（『南部史要』）。

経済政策という点でも、藩主の代替わりという点でも、享保期は前期と後期で隔世の感があるようにも見受けられる。

2. 享保後期に盛岡藩領で発生した火災

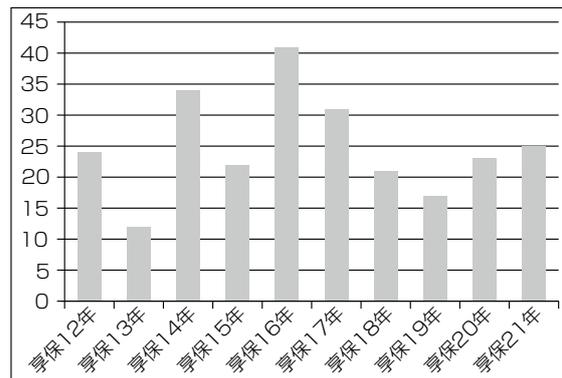
享保後期に盛岡藩領で発生した火災は、『盛岡藩雑書』の享保12年（1727）から21年（1736）のあいだに、大小合わせて250件が確認できる（別表）。同じ10年間で考えると、やや前期より多くなっている。

年間の発生件数はばらつきが大きく、享保13年（1728）が最少の12件、享保16年（1731）が最多で41件となっている（表1・グラフ1）。

表1 享保後期盛岡藩領で発生した火災（年別）

発生年	発生件数
享保12年	24
享保13年	12
享保14年	34
享保15年	22
享保16年	41
享保17年	31
享保18年	21
享保19年	17
享保20年	23
享保21年	25
合計	250

グラフ1 享保後期盛岡藩領で発生した火災（年別）



発生した火災はほとんど1軒が自火で焼失したり、類焼しても数軒程度という規模のものであるが、享保14年の盛岡大火のような数千件が被災した規模のものも発生している。これについては後述する。

2-1. 享保12年（1727）

年間で24件の火災が発生している。6月29日（新暦8月16日）には、盛岡城下で30軒余りが延焼する中規模の火災が発生している。

2-2. 享保13年（1728）

年間発生件数は12件と最も少ない。全て延焼は数軒までの小規模火災で、このことからだけ見れば平穏だったと言える。そのほかに盛岡城内の賄所で失火があったようだ。

別表 享保前期盛岡藩領で発生した火災一覧
(No.は前稿表1からの続き番号)

No.	記載日	発生日		天気	時刻	火元		被害			その他				
		和暦	グレゴリオ歴			通	町村	焼失家屋	死亡者	牛馬	その他	付火・投火	野火		
223	1月4日	享保十二年	1月3日	1727	1月24日	晴	卯刻	6:00	厨川		1		3		
224	1月11日	享保十二年	1月6日	1727	1月27日	雪(大風雪)	夜		三戸	夏坂御番所				番所	
225	1月19日	享保十二年	1月3日	1727	1月24日	晴			沼宮内	荒木田村	1		2		
226	閏1月7日	享保十二年	1月30日	1727	2月20日	(当日分難書欠)			五戸	切田村	2				
227	2月7日	享保十二年	閏1月29日	1727	3月21日	曇、風			田名部	田名部町田学院(山伏)				田学院	
228	3月7日	享保十二年	3月6日	1727	4月26日	晴			大迫	亀ヶ森村	2				
229	3月16日	享保十二年	3月16日	1727	5月6日	天候欠			栗谷河					田屋	
230	3月17日	享保十二年	3月15日	1727	5月5日	天候欠			沼宮内		3				
231	3月20日	享保十二年	3月20日	1727	5月10日	晴天			栗谷川	下厨河村	1			天照寺	
232	3月30日	享保十二年	3月20日	1727	5月10日	晴天			宮古	浅内村	1	1			
233	4月7日	享保十二年	4月7日	1727	5月27日	晴			沼宮内	五日市村	4			土蔵2	
234	4月13日	享保十二年	4月8日	1727	5月28日	晴、風			安俣	上小山田村	1				
235	4月14日	享保十二年	4月11日	1727	5月31日	晴			毛馬内	本木村	2				
236	4月15日	享保十二年	4月15日	1727	6月4日	晴			沼宮内	一方井村	2				
237	4月16日	享保十二年	4月15日	1727	6月4日	晴			長岡		2				
238	4月19日	享保十二年	4月18日	1727	6月7日	天候欠			見前	見前町	1				
239	5月3日	享保十二年	4月27日	1727	6月16日	雨			七戸	板橋村	17				
240	6月13日	享保十二年	6月9日	1727	7月27日	晴			五戸	藤嶋村	2		3		
241	6月13日	享保十二年	6月10日	1727	7月28日	晴			野田	安家村	1			鷹匠逗留中、証文等焼失	
242	6月29日	享保十二年	6月29日	1727	8月16日	晴天	午ノ刻	12:00	盛岡城下	長町	34				
243	8月3日	享保十二年	7月26日	1727	9月11日	晴			野辺地	有戸村	16		5		
244	10月6日	享保十二年	10月3日	1727	11月15日	晴			牽石	上野村	1		3		
245	12月30日	享保十二年	12月30日	1728	2月9日	天候欠			野辺地	有戸村	1				
246	(享保十三年)1月24日	享保十二年	12月29日	1728	2月8日	天候欠			七戸		1				
247	2月15日	享保十三年	2月15日	1728	3月25日	晴、風			盛岡城内	賄所				賄所	
248	3月11日	享保十三年	3月9日	1728	4月17日	晴			花輪	夏井村	2				
249	3月21日	享保十三年	3月14日	1728	4月22日	晴			五戸	天落瀬村	3				
250	4月2日	享保十三年	3月23日	1728	5月1日	晴			宮古	夏屋村	1		2		
251	4月11日	享保十三年	4月11日	1728	5月19日	晴			沢内	下前村	1				
252	4月11日	享保十三年	4月11日	1728	5月19日	晴			五戸	下吉田村	2				
253	5月11日	享保十三年	5月11日	1728	6月18日	晴	朝七時	4:00	栗谷川	赤平村	1				
254	9月25日	享保十三年	9月22日	1728	10月24日	曇			野田	野田村	3				
255	10月24日	享保十三年	10月23日	1728	11月24日	晴	夜四時	22:00	長岡	大巻村	1		1		
256	11月28日	享保十三年	11月28日	1728	12月28日	晴			毛馬内	蔵沢村	1				
257	12月6日	享保十三年	12月6日	1729	1月5日	曇			毛馬内	草木村	1				
258	12月8日	享保十三年	12月4日	1729	1月3日	雪			毛馬内	下小路村	1		2		
259	2月2日	享保十四年	2月2日	1729	3月1日	天候欠			寺林	北寺林村台所屋敷	1				
260	3月10日	享保十四年	3月3日	1729	3月31日	天候欠			五戸	戸来村	1	1	4		
261	3月13日	享保十四年	3月9日	1729	4月6日	南風、時々雨			鬼柳	上鬼柳	1				
262	3月23日	享保十四年	3月21日	1729	4月18日	晴			伝法寺	小屋敷村	1				
263	3月25日	享保十四年	3月24日	1729	4月21日	曇			栗谷川	篠木村	1		4		
264	3月29日	享保十四年	3月23日	1729	4月20日	午刻より風雨			沼宮内	荒田村	1				
265	4月1日	享保十四年	3月29日	1729	4月26日	晴			沼宮内	田頭村	3				
266	4月2日	享保十四年	4月2日	1729	4月29日	晴、午下刻雨			大迫	中町	47		1		
267	4月3日	享保十四年	4月3日	1729	4月30日		未下刻	14:30	盛岡城下	鷹匠小路・上衆小路・餌差小路・吹手町・内加賀野・八幡丁・馬町・石町・水主丁・六日町・上小路・紺屋町・茸手町・肴町・新町・十三日町・鉦屋町					
268	4月3日・4月5日	享保十四年	4月3日	1729	4月30日	天候欠			福岡	小鳥屋村	3				
269	4月7日	享保十四年	3月28日	1729	4月25日	晴天			田名部	大間村	10		2		
270	4月7日	享保十四年	4月7日	1729	5月4日	晴			華輪	田山村	6				
271	4月8日	享保十四年	4月8日	1729	5月5日	晴				神子田	1			小頭宅雪隠から出火	?
272	4月11日	享保十四年	4月7日	1729	5月4日	晴			五戸	戸来村	2				
273	4月12日	享保十四年	4月12日	1729	5月9日	天候欠	未刻	14:00	盛岡城下	仁王丁	12			覚善院・長谷寺	
274	4月16日	享保十四年	4月14日	1729	5月11日	雨	夜		万丁目	里川口村	1				
275	4月17日	享保十四年	4月16日	1729	5月13日	曇			見前	高田村	1				
276	4月19日	享保十四年	4月7日	1729	5月4日	晴			五戸	戸来村	2				
277	4月20日	享保十四年	4月17日	1729	5月14日	天候欠			三戸	石亀村	7				
278	4月22日	享保十四年	4月22日	1729	5月19日	晴			牽石		1		5		
279	4月22日	享保十四年	4月21日	1729	5月18日	晴	亥下刻	22:30	盛岡城下					願教寺庫裏脇出火	?
280	4月27日	享保十四年	4月4日	1729	5月1日	晴天	夜		盛岡城下	本町	1				○
281	4月29日	享保十四年	4月28日	1729	5月25日	曇	子ノ刻	0:00	大迫	達曾部村	44				
282	5月9日	享保十四年	5月4日	1729	5月31日	小雨			野田	端神村	1		10		
283	6月12日	享保十四年	6月12日	1729	7月7日	晴天			毛馬内	牛馬長根村	1		2		
284	6月14日	享保十四年	6月13日	1729	7月8日	天候欠	晩		牽石	長山村	1				
285	7月11日	享保十四年	7月10日	1729	8月4日	天候欠	晩		飯岡		1				
286	10月29日	享保十四年	10月25日	1729	12月15日	雨			宮古	田代村	1				
287	11月10日	享保十四年	先日	1729	-	-			宮古	茂市村	5				
288	12月1日	享保十四年	11月25日	1730	1月13日	晴			五戸	沢田村	4				
289	12月4日	享保十四年	11月30日	1730	1月18日	晴			宮古	蔵鶏村	7				
290	12月5日	享保十四年	11月27日	1730	1月15日	曇時々雪			野辺地	横浜村	25		6	土蔵1、板蔵3	
291	12月13日	享保十四年	12月7日	1730	1月25日	晴			花輪	水沢村	1		1		
292	12月21日	享保十四年	12月17日	1730	2月4日	晴			宮古	崎山村	2				
293	3月7日	享保十五年	3月4日	1730	4月20日	時々雨			万丁目	南根子田村	1				
294	3月11日	享保十五年	3月11日	1730	4月27日	晴	未刻	14:00	盛岡城下	馬場横丁				校馬場美濃部長左衛門預御役屋不残、中通御馬屋半分	

No.	記載日	発生日				天気	時刻	火元					被害			その他	
		和暦		グレゴリオ歴				通	町村	焼失家屋	死亡者	牛馬	その他	付火・投火	野火		
295	3月19日	享保十五年	3月18日	1730	5月4日	晴	夜四時 22:00	盛岡城下?	村瀬又右衛門家						○		
296	3月27日	享保十五年	3月25日	1730	5月11日	晴		福岡	堀切村	45							
297	4月14日	享保十五年	4月7日	1730	5月23日	曇		福岡	白鳥村	4							
298	4月24日	享保十五年	4月22日	1730	6月7日	晴	申ノ刻 16:00	万丁目	上根子	1							
299	6月1日	享保十五年	5月27日	1730	7月11日	晴		八幡	八幡村	2							
300	6月5日	享保十五年	5月29日	1730	7月13日	晴		宮古	有雲村	1	1						
301	6月11日	享保十五年	6月6日	1730	7月20日	晴	夜	八幡	八重畑	1							
302	8月21日	享保十五年	8月16日	1730	9月27日	晴		五戸		5							
303	9月7日	享保十五年	9月7日	1730	10月18日	曇	丑ノ刻 2:00	盛岡城下	新山堂	3							
304	9月9日、 10月30日	享保十五年	9月6日	1730	10月17日	晴	丑ノ刻 2:00	野辺地	本町通不残、新町通・御組丁共、八幡町迄不残、御飯屋通も焼失、端々ハ少々残	162					土蔵13、家来屋敷11、足輕屋敷15、高札場1、社1		
305	9月17日	享保十五年	9月15日	1730	10月26日	晴	酉刻 18:00	沢内	新町	12	13						
306	10月18日	享保十五年	10月15日	1730	11月24日	曇		(宮古)	荒川村	1							
307	11月9日	享保十五年	11月1日	1730	12月10日	雨	夜	福岡		1							
308	11月13日	享保十五年	11月10日	1730	12月19日	晴	晩	大槌	八日町						酒屋1、土蔵共小舎10、寺地1		
309	11月13日	享保十五年	11月9日	1730	12月18日	晴	晩	三戸	山口村	9	2						
310	11月25日	享保十五年	11月17日	1730	12月26日	小雪	夜八時 2:00	宮古	中里村	1	8						
311	11月25日	享保十五年	11月20日	1730	12月29日	晴	晩	宮古	中里村	1							
312	12月17日	享保十五年	12月13日	1731	1月20日	晴		八幡	葛村	1							
313	12月23日	享保十五年	12月20日	1731	1月27日	晴		沼宮内	蔵入百姓	1	3						
314	12月26日	享保十五年	12月26日	1731	2月2日	小雪		五戸	馬町	9	4						
315	1月25日	享保十六年	1月23日	1731	3月1日	晴		長岡	彦部村	1	1	1					
316	2月18日	享保十六年	2月17日	1731	3月24日	小雪		向中野	大宮村	1							
317	2月30日	享保十六年	2月25日	1731	4月1日	晴		五戸	七崎村	8							
318	3月8日	享保十六年	3月4日	1731	4月10日	晴、風		三戸	斗内村	4							
319	3月13日	享保十六年	3月6日	1731	4月12日	曇	夜	野田	岩泉村						町内残らず	制札5枚焼失	
320	3月18日	享保十六年	3月15日	1731	4月21日	晴		福岡		5							
321	3月19日	享保十六年	3月19日	1731	4月25日	風	午刻 12:00	郡山	日詰町	1							
322	3月24日	享保十六年	3月6日	1731	4月12日	曇	晩	野田	岩泉町	1							
323	3月24日	享保十六年	3月24日	1731	4月30日	雨		八幡	石鳥谷町	1							
324	3月29日	享保十六年	3月27日	1731	5月3日	晴	夜九時 0:00	上栗谷河	上台	1							
325	4月1日	享保十六年	3月28日	1731	5月4日	晴		栗谷川	滝沢村	2							
326	4月8日	享保十六年	3月29日	1731	5月5日	晴		福岡	中里村	10							
327	4月13日	享保十六年	4月11日	1731	5月16日	曇		花輪	長牛村	1							
328	4月21日	享保十六年	4月13日	1731	5月18日	曇		野田	下戸鎮村	1	10						
329	4月21日	享保十六年	4月21日	1731	5月26日	晴	未下刻 14:30	盛岡城下	上小路	15					2軒潰、東中野村田屋1軒焼失		
330	4月23日	享保十六年	4月21日	1731	5月26日	晴		大迫	下町	20							
331	4月24日	享保十六年	4月24日	1731	5月29日	晴	曙	長岡	彦部村	1							
332	4月24日	享保十六年	4月19日	1731	5月24日	晴	夜	黒沢尻	横川目	1							
333	4月29日	享保十六年	4月24日	1731	5月29日	晴	夜	五戸	藤島村	8							
334	4月29日	享保十六年	4月27日	1731	6月1日	晴		三戸							八幡別当普門院居宅1		
335	5月1日	享保十六年	4月30日	1731	6月4日	晴	子ノ刻 12:00	長岡	赤沢村	1							
336	5月15日	享保十六年	5月12日	1731	6月16日	晴		三戸	聖寿寺百姓	1							
337	5月15日	享保十六年	5月15日	1731	6月19日	曇	夜戌刻 20:00	盛岡城下	長町	12					4軒潰		
338	6月3日	享保十六年	6月1日	1731	7月4日	薄曇	七半頃 -	栗谷河	篠木村	1							
339	6月9日	享保十六年	6月8日	1731	7月11日	晴		栗谷河	大釜村	1							
340	6月12日	享保十六年	6月11日	1731	7月14日	晴	夜九時 0:00		南伝法寺村	1							
341	7月7日	享保十六年	7月7日	1731	8月9日	晴		花輪	夏井村	3							
342	8月24日	享保十六年	8月24日	1731	9月24日	曇	巳刻 10:00	盛岡城下	夕顔瀬向	1							
343	8月28日	享保十六年	8月25日	1731	9月25日	曇	夜	花輪	浦川原町	10							
344	9月4日	享保十六年	8月27日	1731	9月27日	曇		野田	安家村	2	2						
345	9月11日	享保十六年	9月8日	1731	10月8日	曇		花巻	成島村	1							
346	9月11日	享保十六年	9月11日	1731	10月11日	晴	未ノ刻 14:00	盛岡城下	上丁	22					田屋1		
347	9月13日	享保十六年	9月11日	1731	10月11日	晴		栗谷河	滝沢村	1	1	1					
348	9月13日	享保十六年	9月12日	1731	10月12日	岩鷲山初雪降	夜		下飯岡村	1	2						
349	9月27日	享保十六年	9月22日	1731	10月22日	天候欠		野田	安家村	9							
350	11月13日	享保十六年	11月9日	1731	12月7日	晴	夜	三戸	斗内村	1							
351	11月13日	享保十六年	11月9日	1731	12月7日	晴	夜	万丁目	鍋倉村	1	2	1					
352	12月3日	享保十六年	12月2日	1731	12月30日	晴	九時 -	上田	高畑村	2	2						
353	12月6日	享保十六年	12月6日	1732	1月3日	晴	亥ノ刻 22:00	盛岡城下	八幡丁	3					1軒潰		
354	12月6日	享保十六年	12月5日	1732	1月2日	朝小雪昼晴	夜	沼宮内	洗民町	5							
355	12月19日	享保十六年	12月14日	1732	1月11日	晴		毛馬内		1	1	1					
356	1月8日	享保十七年	1月7日	1732	2月2日	晴	八時 -	上田	川目村	1							
357	1月10日	享保十七年	1月18日	1732	2月13日	曇、小雪	未ノ刻 14:00	盛岡城内	本丸						御末御下居		
358	2月16日	享保十七年	2月11日	1732	3月7日	晴	夜四時 22:00	五戸	七崎村	11							
359	2月16日	享保十七年	2月14日	1732	3月10日	晴		上田	生ヶ畑村	1							
360	3月4日	享保十七年	3月4日	1732	3月29日	晴		宮古	赤前村	3							
361	3月8日	享保十七年	3月5日	1732	3月30日	晴	夜四時 22:00		見前	1					土蔵		
362	3月12日	享保十七年	3月12日	1732	4月6日	曇	戌刻 20:00	盛岡城下	長町	140					潰家12		
363	3月17日	享保十七年	3月12日	1732	4月6日	曇	暮	安俣	下小山田村	1	7				土蔵		
364	3月18日	享保十七年	3月17日	1732	4月11日	小雨	夜	鞆	幸石町	70							
365	3月21日	享保十七年	3月21日	1732	4月15日	晴	亥ノ刻 22:00		志家村	6							
366	3月26日	享保十七年	3月26日	1732	4月20日	晴	午ノ刻 12:00	盛岡城下	水主町	305							
367	3月26日	享保十七年	3月26日	1732	4月20日	晴	夜五時半 21:00	盛岡城下	外加賀野						馬屋		
368	3月29日	享保十七年	3月28日	1732	4月22日	朝小雪、風	晩	徳田		1							
369	3月30日	享保十七年	3月29日	1732	4月23日	晴		伝法寺	下村	1							
370	4月2日	享保十七年	4月1日	1732	4月25日	晴、風	夜八時 2:00		滝沢村	1	1	2					
371	5月13日	享保十七年	5月9日	1732	6月1日	晴		五戸	切屋村	2							
372	5月13日	享保十七年	5月8日	1732	5月31日	曇		田名部	奥内	50							
373	5月25日	享保十七年	5月24日	1732	6月16日	晴	昼	厨川	鶴飼村	1							
374	閏5月4日	享保十七年	閏5月1日	1732	6月22日	曇	夜	花輪	長内村	2	1						

享保後期（1727～1736）盛岡藩領における火災に関する基礎的考察

No.	記載日	発生日		天気	時刻	火元		被害			その他				
		和暦	グレゴリオ歴			通	町村	焼失家屋	死亡者	牛馬	その他	付火・投火	野火		
375	閏5月13日	享保十七年	閏5月10日	1732	7月1日	晴	夜		上田	平沢戸村	2				
376	閏5月16日	享保十七年	閏5月14日	1732	7月5日	雷雨			沼宮内	川口村	1				
377	閏5月22日	享保十七年	閏5月19日	1732	7月10日	雨	夜		野田	宇部村	1				
378	6月12日	享保十七年	6月7日	1732	7月28日	晴	夜		野田	深田村	2	2			
379	7月6日	享保十七年	7月5日	1732	8月24日	晴			長岡		1				
380	7月28日	享保十七年	7月25日	1732	9月13日	曇	子ノ刻 0:00		三戸		1				
381	9月8日	享保十七年	9月5日	1732	10月23日	晴	七時 -		福岡	中山村	1				
382	9月20日	享保十七年	9月20日	1732	11月7日	晴	昼頃 12:00		徳田	高水寺村	1				
383	9月24日	享保十七年	9月23日	1732	11月10日	雨			沼宮内	松尾村	1				
384	11月13日	享保十七年	11月12日	1732	12月28日	晴	夜		上田	砂子沢村	2		3		
385	11月17日	享保十七年	11月17日	1733	1月2日	晴	辰ノ刻 8:00					1		法恩寺衆寮	
386	12月13日	享保十七年	12月12日	1733	1月27日	雪	夜八時 2:00			宮手村	1		3		
387	1月17日	享保十八年	1月16日	1733	3月1日	曇	子之刻 0:00		雫石	長山村	1		2		
388	1月18日	享保十八年	1月14日	1733	2月27日	晴	晩		黒沢尻	菅田村	1		1		
389	2月16日	享保十八年	2月12日	1733	3月27日	晴			野田	普代村	3		5		
390	2月21日	享保十八年	2月20日	1733	4月4日	晴、風烈	亥刻 22:00		花巻城下	四日町	22				
391	2月29日	享保十八年	2月28日	1733	4月12日	曇	七時 -		山岸村		1				
392	3月1日	享保十八年	2月28日	1733	4月12日	曇			野田	宇部村	2				
393	3月1日	享保十八年	2月1日	1733	3月16日	晴			福岡	一戸町袋丁	8				
394	3月9日	享保十八年	3月6日	1733	4月19日	晴、風			沼宮内	玉山村	1			西福院家類焼	
395	3月9日	享保十八年	3月7日	1733	4月20日	晴			毛馬内	瀬田名村	1		2		
396	3月14日	享保十八年	3月10日	1733	4月23日	曇			五戸	相内	7				
397	4月2日	享保十八年	4月2日	1733	5月15日	雨			寺林	小森林村	1				
398	4月4日	享保十八年	3月27日	1733	5月10日	晴	夜		田名部	川内村東町	32				
399	4月5日	享保十八年	4月5日	1733	5月18日	晴	夜		上田	東中野村	1		1		
400	9月8日	享保十八年	9月7日	1733	10月14日	晴	夜五時 20:00		上田	砂沢村	1		1		
401	9月11日	享保十八年	9月8日	1733	10月15日	雨	晩		二子	成田村	1		10		
402	9月11日	享保十八年	9月7日	1733	10月14日	晴			寺林	西宮野目村	1				
403	9月23日	享保十八年	9月23日	1733	10月30日	晴			田名部	柳町	13				
404	10月19日	享保十八年	10月18日	1733	11月24日	晴	晩		飯岡	下太田村	1				
405	10月21日	享保十八年	10月17日	1733	11月23日	晴	夜		万丁目	湯口村	1				
406	12月11日	享保十八年	12月11日	1734	1月15日	晴	朝四時 10:00		上田	庄ヶ畑村	1				
407	12月20日	享保十八年	12月19日	1734	1月23日	雪	子刻 0:00		盛岡城下		1				
408	3月2日	享保十九年	2月26日	1734	3月30日	曇	夜		三戸	田子村	4		4		
409	3月7日	享保十九年	3月3日	1734	4月6日	晴	夜八時 2:00		福岡	火行村	6		3		
410	3月9日	享保十九年	3月9日	1734	4月12日	晴			厨川	下栗谷川夕顔瀬				小屋1、人足小屋1	
411	3月14日	享保十九年	3月9日	1734	4月12日	晴			五戸	下田村	8				
412	3月19日	享保十九年	3月18日	1734	4月21日	晴	夜五時 20:00		厨川	土溝村	1				
413	3月21日	享保十九年	3月21日	1734	4月24日	晴、風	未之上刻 13:30		盛岡城下	夕顔瀬向	1				
414	4月5日	享保十九年	4月5日	1734	5月7日	晴	丑下刻 2:30		盛岡城下		1				
415	4月5日	享保十九年	4月5日	1734	5月7日	晴			沼宮内	堀切村	13				
416	4月24日	享保十九年	4月23日	1734	5月25日	晴	夜四時 22:00		長岡	彦部村	1		2		
417	4月26日	享保十九年	3月28日	1734	5月1日	晴	未上刻 13:30		盛岡城下	三戸丁	231	1	3	寺2、役屋鋪4、半屋1	
418	6月8日	享保十九年	6月5日	1734	7月5日	晴			沼宮内	荒木田村	1				
419	6月8日	享保十九年	6月5日	1734	7月5日	晴			二子	飯豊村	1				
420	10月16日	享保十九年	10月11日	1734	11月6日	晴	夜		宮古	多老町	6				
421	10月16日	享保十九年	10月10日	1734	11月5日	風	丑ノ刻 2:00		宮古	天安寺門前	5			土蔵2	
422	10月17日	享保十九年	10月16日	1734	11月11日	曇			東徳田村		1				
423	10月19日	享保十九年	10月16日	1734	11月11日	曇	夜		花輪	松館村	1				
424	12月7日	享保十九年	12月5日	1734	12月29日	曇			大迫	外川目村	4		6		
425	2月1日	享保二十年	1月28日	1735	2月20日	晴	夜		黒沢尻	横川目村	1		1		
426	2月27日	享保二十年	2月22日	1735	3月16日	晴	夜		福岡	内堀野村	5				
427	3月3日	享保二十年	2月26日	1735	3月20日	晴	夜		福岡	四野村	1		4		
428	3月8日	享保二十年	3月7日	1735	3月30日	晴	夜		厨川	揚沢村	2		2		
429	3月20日	享保二十年	3月19日	1735	4月11日	晴	夜		雫石	長山村	1				
430	3月26日	享保二十年	3月21日	1735	4月13日	晴	夜		野田	木壳内村	2				
431	3月27日	享保二十年	3月24日	1735	4月16日	晴			三戸		8				
432	閏3月9日	享保二十年	閏3月9日	1735	5月1日	晴			福岡	根守村	15				
433	閏3月19日	享保二十年	閏3月19日	1735	5月11日	曇	巳中刻 10:00			東中野村	2				
434	閏3月22日	享保二十年	閏3月18日	1735	5月10日	曇	夜		五戸	浅水村	15		2		
435	閏3月28日	享保二十年	閏3月27日	1735	5月19日	晴	夜		野田	日戸村	5		1		
436	4月2日	享保二十年	閏3月18日	1735	5月10日	曇			田名部	河内銀南木村	17				
437	4月9日	享保二十年	4月5日	1735	5月26日	晴	昼		黒沢尻	藤根村	2				
438	4月20日	享保二十年	4月16日	1735	6月6日	晴	丑刻 2:00		毛馬内					荒沢月山拝殿、棟札2、権現1、杉2本	
439	5月17日	享保二十年	5月15日	1735	7月5日	晴	夜		安俣	矢沢	1				
440	6月22日	享保二十年	6月17日	1735	8月5日	晴			七戸	新山村	7				
441	8月17日	享保二十年	8月16日	1735	10月2日	晴	八時 -		沼宮内	宮内村・五日市村	8				
442	10月3日	享保二十年	10月2日	1735	11月16日	雪	未刻 14:00		徳田	東徳田村	1				
443	10月9日	享保二十年	10月5日	1735	11月19日	雨、昼晴	夜四時 22:00		黒沢尻	横川村	1		1		
444	10月12日	享保二十年	10月8日	1735	11月22日	晴	亥刻 22:00		毛馬内	大湯	2			湯坪開天井半分程	
445	10月14日	享保二十年	10月14日	1735	11月28日	雨			万丁目	南万丁目村	1				
446	12月7日	享保二十年	12月4日	1736	1月16日	晴	晩		花輪	松館村	1				
447	12月10日	享保二十年	12月10日	1736	1月22日	晴	丑刻 2:00		盛岡城下	荒町	4				
448	1月18日	享保二十一年	1月18日	1736	2月29日	晴	丑ノ刻 2:00		盛岡城下	永福寺門前	1				
449	1月24日	享保二十一年	1月23日	1736	3月5日	晴	晩		徳田	土橋村	1				
450	2月3日	享保二十一年	2月3日	1736	3月14日	晴			雫石	南畑村	1		2		
451	3月14日	享保二十一年	3月14日	1736	4月24日	雨			雫石	篠崎村	1				
452	3月19日	享保二十一年	3月14日	1736	4月24日	雨			五戸	沢田村	6		1		
453	3月22日	享保二十一年	3月20日	1736	4月30日	晴			毛馬内	大湯町	32				
454	4月2日	享保二十一年	3月30日	1736	5月10日	晴			毛馬内	加屋町	23				
455	4月5日	享保二十一年	4月5日	1736	5月15日	晴			郡山	日詰町		1		来迎寺末庵1	
456	4月5日	享保二十一年	4月6日	1736	5月16日	晴			花巻城下	鳩岡崎村	1		1		

No.	記載日	発生日		天気	時刻	火元		被害			その他				
		和暦	グレゴリオ歴			通	町村	焼失家屋	死亡者	牛馬	その他	付火・投火	野火		
457	4月12日	享保二十一年	4月7日	1736	5月17日	晴		野田	安家村	1					
458	5月22日	享保二十一年	5月20日	1736	6月28日	晴		大迫	大迫町	1					
459	7月24日	享保二十一年	7月23日	1736	8月29日	晴	夜	厨川	下厨川村	1					
460	9月1日	享保二十一年	8月29日	1736	10月3日	晴		花巻城下		1					
461	9月13日	享保二十一年	9月12日	1736	10月16日	晴	夜	飯岡	中太田村	1					
462	9月13日	享保二十一年	9月13日	1736	10月17日	晴	午中刻 12:00	三戸	三戸丁	6			八幡普門院		
463	9月20日	享保二十一年	9月17日	1736	10月21日	曇	夜	福岡	小繁村	22					
464	9月26日	享保二十一年	9月23日	1736	10月27日	晴		宮古	山口村	1		3			
465	10月13日	享保二十一年	10月10日	1736	11月12日	晴		七戸	横町	81			土蔵7、寺2		
466	10月26日	享保二十一年	3月	1736				花巻城下		1					
467	11月12日	享保二十一年	11月11日	1736	12月12日	晴	晩	大迫	上町	11					
468	11月21日	享保二十一年	11月21日	1736	12月22日	晴	朝	長岡	遠山村	1					
469	11月24日	享保二十一年	11月20日	1736	12月21日	晴	夜	五戸	荒町	46			潰家3		
470	11月25日	享保二十一年	11月24日	1736	12月25日	細雨	夜	雫石	雫石町	1					
471	11月28日	享保二十一年	11月25日	1736	12月26日	曇		花輪	尾去沢村	1					
472	12月24日	享保二十一年	12月11日	1737	1月11日	晴		三戸	石亀村	1					

表2 享保後期盛岡藩領で発生した火災（月別）

発生月 (グレゴリオ歴)	発生件数
1月	23
2月	10
3月	19
4月	47
5月	54
6月	15
7月	17
8月	6
9月	6
10月	20
11月	16
12月	17
合計	250

グラフ2 享保後期盛岡藩領で発生した火災（月別）

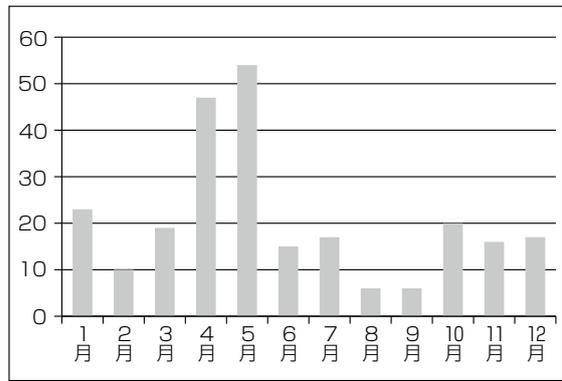


表3 享保13年火災発生件数（月別）

発生月 (享保13年)	発生件数
1月	2
2月	0
3月	1
4月	2
5月	3
6月	1
7月	0
8月	0
9月	0
10月	1
11月	1
12月	1
合計	12

グラフ3 享保13年火災発生件数（月別）

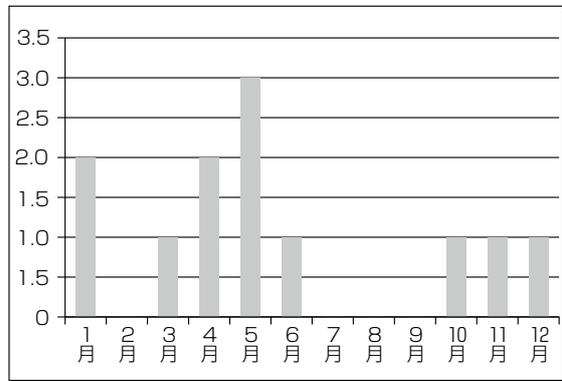
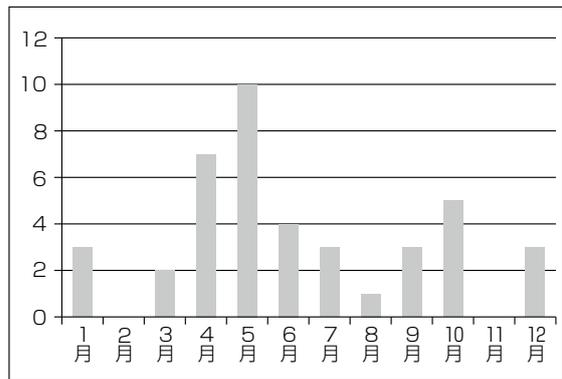


表4 享保16年火災発生件数（月別）

発生月 (享保16年)	発生件数
1月	3
2月	0
3月	2
4月	7
5月	10
6月	4
7月	3
8月	1
9月	3
10月	5
11月	0
12月	3
合計	41

グラフ4 享保16年火災発生件数（月別）



2-3. 享保14年（1729）

年間の火災発生件数は34件と享保後期で2番目に多い。この年は大火が多く、4月2日（新暦4月29日）に大迫の中町で47軒を焼く火災が発生し、その翌日4月3日（新暦4月30日）には、1,721軒（『篤焉家訓』より計算）を焼く空前の大規模火災が発生した。大迫通では、さらに4月28日（新暦5月25日）に達増部村で44軒が類焼する火災が発生しており、大火を含め火災の多い年であったと言える。

2-4. 享保15年（1730）

この年は年間で22件の火災が発生しており、享保後期では唯一の付火と呼ばれる放火の記述が確認される。そのほか、3月25日（新暦5月11日）には、野辺地で「本町通不残、新町通・御組丁共、八幡町迄不残、御仮屋通も焼失、端々ハ少々残」り、大小合わせて162軒が焼失、土蔵13、家来屋敷11、足軽屋敷15、高札場1、社1などの被害が見られた大火が発生している。

2-5. 享保16年（1731）

火災の年間発生件数は41件と享保期を通じて最も多い。しかし、規模としては数軒程度の小規模なもの、大きくなっても20軒程度にとどまる。また、特徴として、ところどころ被害家屋の集計に「潰家」という記載が見られる。例えば、享保12年にも中規模の火災が発生した盛岡城下の長町では、5月15日（新暦6月19日）に発生した火災で、12軒焼失しているが、そのほかに潰家を4軒計上している。これは「つぶしいえ」と読み、火災の延焼を防ぐために破壊消防を行なったものと考えられる。

2-6. 享保17年（1732）

前年より10件減少し、31件の火災が発生している。この年から享保19年（1734）までは、火災の発生件数自体は減少し続ける。しかし、同年には50軒以上類焼の大火が、3月12日（新暦4月6日）、3月17日（新暦4月11日）、3月26日（新暦4月20日）、5月8日（新暦5月31日）と、立て続けに4件発生しており、後期に発生した大火の実に半数を占める（表5）。

2-7. 享保18年（1733）

前年よりさらに10件減少して、全体で21件の火災発生数である。2月20日（新暦4月4日）に、花巻城下の四日町で22軒を焼く火災が発生している。また、3月27日（新暦5月10日）田名部通でも32軒類焼の中規模火災が発生している。

2-8. 享保19年（1734）

年間で17件の火災が発生。3月28日（新暦5月1日）には、盛岡城下の三戸丁で231軒を焼失する大火が発生し、1名が亡くなった。

2-9. 享保20年（1735）

年間で23件の火災が発生した。規模は最大でも17軒延焼のもので、大規模な火災は発生していない。

2-10. 享保21年（1736）

火災の年間発生件数は25件。10月10日（新暦11月12日）に七戸の横町で大火が発生、81軒が延焼した。

3. 火災の発生と傾向

以上10年分の火災について、月ごとに件数を比較すると表2・グラフ2のようになる。

ここで確認できるのは、享保前期と同じ傾向で、やはり4月と5月の火災の発生件数の突出した多さが特徴的である。

この特徴が特異年の結果でないことを示すために、発生件数最少の享保13年と最大の享保16年の月ごとの火災発生件数も示す（表3・4、グラフ3・4）。どちらにおいても4月と5月の発生件数が顕著に多くなっている。

天気付（註2）で当日享保後期全体のうち14件（6.8%）に「風」の記述が見える。

また、被災家屋が50軒以上の規模となる火災は主に4月から5月にかけてのころに発生していることにも注目すべきだろう（表5）。グレゴリオ暦の4月前後は風が強く乾燥しているため、火災がいったん発生すると延焼の危険性が高かったといえる。また、享保前期と比較して後期の大火は圧倒的な規模の大きさが特徴的である。

表5 焼失家屋50軒以上の火災

発生日 (グレゴリオ歴)	焼失家屋	発生地
1729(享保14) 4月30日	1,721	盛岡城下
1732(享保17) 4月20日	305	盛岡城下
1734(享保19) 5月1日	231	盛岡城下
1730(享保15) 9月6日	162	野辺地通
1732(享保17) 4月11日	142	雫石通
1732(享保17) 4月6日	140	盛岡城下
1736(享保21) 11月12日	81	七戸通
1732(享保17) 5月31日	50	田名部通

火災の発生時期についてのほかに、火災の発生する要素としては、あかり取りに火を使用する夜間の発生が多かったのではないかという点も検証したい。『盛岡藩雑書』の記載では、発生時間帯がはっきり示されたものは全体の半数にも及ばない。これらを6:00～17:59(昼)と18:00～5:59(夜)に分類して件数を比較した(表6・グラフ5)。

表6・グラフ5から見て取れるように、火災の発生時間帯は昼よりも夜のほうが圧倒的に多く、倍以上にもなる。この傾向は享保前期より後期の方が顕著である。さらに、天候について触れておくと、やはり火災の発生は晴れの日の発生が圧倒的に多い(表7・グラフ6)。この傾向も、同様に前期より後期の方が顕著である。

なお、通ごとに集計すると、表8のようになり、栗谷川通、沼宮内通と福岡通、宮古通、野田通、三戸通、五戸通、毛馬内通で発生件数が多くなっている。前期と比較して、顕著に多い地域は少なくなる。しかし、盛岡城下の発生は21件中4件が大火という状況で、しかも発生すると大規模を通り越して超大規模とも言えるような大火が発生するのである。

表6 火災発生件数(時間帯別)

発生時間帯	発生件数
昼	24
夜	87
不明	141

グラフ5 火災発生件数(時間帯別)

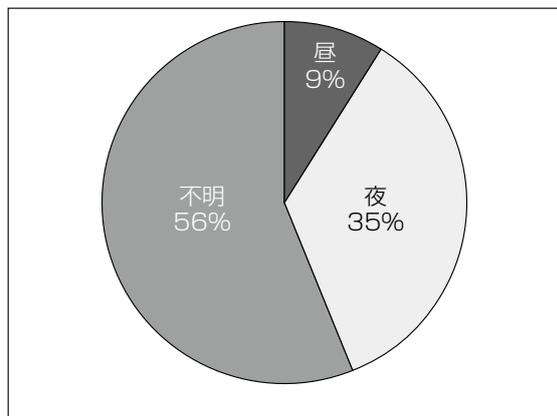
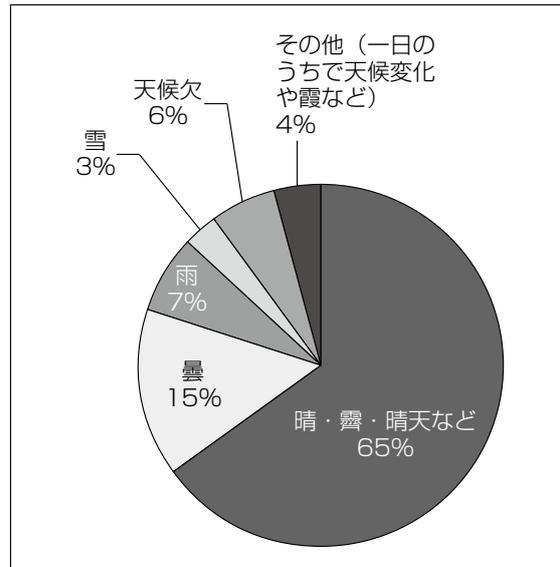


表7 火災発生日の天候

発生日の天候	発生件数
晴・霽・晴天など	162
曇	37
雨	19
雪	7
天候欠	15
その他(一日のうちで天候変化や霞など)	10

グラフ6 火災発生日の天候



5. 大火の具体的被害の様子

—享保14年盛岡大火を例に—

享保前期において、花巻城下では50軒以上が類焼し大火と呼べるような規模の火災が4件も発生していたが、後期には花巻での大規模火災はほぼ発生しておらず、盛岡城下で壊滅的な大規模火災が発生する様子が見て取れる(表5)。その中でも、今回は享保14年の大火を例に、被害の様子をまとめてみることにする。

史料1「篤焉家訓 巻之22」

(もりおか歴史文化館所蔵)

享保十四年己酉年四月三日未の上刻、大沢川原新土手横丁南側中居円太郎より出火、西風にて大沢川原東南不残、夫より中鷹匠小路、四つ辻女鹿孫惣宅え飛火附、六日町新町川上え焼上り、紺屋町曲り目迄焼吹手町愛染院、三明院にて火留る、夫より東南肴町、餌指小路、生姜町、八幡丁明神御社拜殿鳥井迄、不残、南は石町、馬町、十三日町、鉈屋町、主水丁十文字迄、

表8 通ごとの火災発生件数

郡	通	発生件数
岩手郡	上田	8
	栗谷川	14
	雫石	9
	向中野	1
志和郡	沼宮内	14
	飯岡	3
	長岡	8
	日詰	0
	見前	3
	徳田	4
稗貫郡	伝法寺	2
	大迫	7
	八幡	4
	寺林	3
	高木	0
和賀郡	万丁目	6
	沢内	2
	黒沢尻	5
	鬼柳	1
閉伊郡	安俵	4
	二子	2
	大槌	1
九戸郡	宮古	15
	遠野	0
九戸郡	野田	15
二戸郡	福岡	13
三戸郡	三戸	12
	五戸	19
鹿角郡	花輪	9
	毛馬内	11
北郡	七戸	4
	野辺地	4
	田名部	6
城下	盛岡城下	21
	花巻城下	1



図1 盛岡藩の通
 (『よくわかる盛岡の歴史』 p.50から引用)

上小路組丁不残、夜丑の刻迄焼る、土蔵は三日程火不消、盛岡初り百二十年來の大火也、是を酉年大火事と唱、

享保14年4月3日(新曆4月30日)の13時過ぎ、大沢川の河原、新土手横町の南側にある仲居円太郎家から出火し、西風にあおられ大沢川の東南は残らず延焼し、そこから中鷹匠小路に飛び火し、火は六日町・紺屋町を経て東南肴町・餌指小路・生姜町・八幡丁明神御社拝殿鳥井まで残らず焼け、南は石町・馬町・十三日町・鉈屋町・主水丁十字まで、上小路組丁も残らず焼失し、鎮火したのは夜中の2時をまわった頃であった(史料1)。被害詳細は史料2の通りである。

史料2「篤焉家訓 卷之22」
(もりおか歴史文化館所蔵)

奥南盛風記に云、
此時猛火八方に散乱れ、狂風坐砂利を飛ばし、方角定りなし、依之焼亡大略左之

如し

- 一、諸士丁 九十二軒 内職人二十四軒
大沢川原、鷹匠小路、馬場丁、餌指小路、大清水上衆小路
- 一、町家 千三百九十二軒
六日町、石丁、十三日町、馬町、川原町、生姜丁、八幡丁、紺屋町、荒町、
- 一、足軽丁 百軒 御子田丁、上小路丁、
- 一、高辻場 二ヶ所 札はずし取中の橋、川原町、
- 一、町宅の諸士 八十七軒
- 一、社 二ヶ所 神明、八幡
- 一、御仮屋 二ヶ所
- 一、惣門 二十三ヶ所
- 一、寺院庵地山伏 二十一ヶ所
- 一、東中野村町家 五十軒
- 一、土蔵 五十一
- 一、穴蔵 十四

此外辻番所、小橋あり、竈数死人不知数



図2 享保盛岡大火の延焼範囲
(『よくわかる盛岡の歴史』 p.56に同p.71を参照加筆)

6. おわりに—今後の課題

本稿では南部領での享保後期の火災について、その特徴や傾向を見てきた。

享保期が終わり、次の元文年間、盛岡藩では加賀金沢藩の前田家から輿入れがあり、その行列に火消し鳶がいたことから、このころから藩お抱えの御用鳶制度を作ることになる。

しかし、安永7年（1778）などにも引き続き大火は発生しており、盛岡藩は寛政10年（1798）に鳶職人を中心に「いろは組」（30人）を作り、文化10年（1813）には、城下23町の火消し組を8組編成したおよそ1000人にのぼる消防組織を編成した。

これまで2稿にわたり、享保期における火災の発生傾向について確認できたが、その後の消防組織の編成過程をふまえて、その発生傾向に変化がないか、引き続き明らかにしたいと考えている。

註

- 1) 『盛岡藩雑書』とは盛岡藩家老の執務日誌で、別名、「南部藩家老席日誌」ともいう。一部欠落はあるものの、寛永21年（1644）～天保11（1840）年まで現存しており、盛岡藩に関する諸事全般が網羅されている公的記録である。原本の所蔵はもりおか歴史文化館であり、現在活字刊行の事業が進められている。本稿では刊行版を活用した。
- 2) 表7の天気付は火災発生当日の『盛岡藩雑書』から引用したものである。現地の天候と多少の違いがあることに留意されたい。

謝辞

もりおか歴史文化館の太田悌子氏には、史料の閲覧・調査において便宜を図っていただいた。記して感謝申し上げます。

参考文献

- 吉田義昭・及川和哉 編著『図説 盛岡四百年』上巻（郷土文化研究会・1983年初版、1992年 補訂2刷）
- 小原茂「『清水家文書』に見る花巻町町民の消防活動について」（『花巻市博物館研究紀要』第11号・2016年）
- 岩手県防災会議 編『岩手県地域防災計画（本編）』（1983年 初版、2016年 改版）
- 長谷川成一「巨大災害と民衆—近世青森町

の大火災を中心に—」（『日本海域歴史大系』第4巻 近世篇I・清文堂・2005年）

加藤章・高橋知己・藤井茂・八木光則『よくわかる盛岡の歴史』（東京書籍・2016年）

東和ふるさと歴史資料館所蔵「成島毘沙門堂資料」について 江戸時代の漁業・成島和紙に関する文書を中心に

因幡敬宏

はじめに

「成島毘沙門堂資料」は、閉館中の東和ふるさと歴史資料館で保管している借受資料である。同館は、平成27年1月から建物の老朽化のため閉館中であり、花巻市内各施設の統廃合を見込んだ将来計画の策定に先立ち、花巻市博物館では資料の袋詰めや目録作成等の整理作業を行った。その結果、成島毘沙門堂の由緒をはじめ、漁業・成島和紙・田畑など、東和地域の村の生業を考える上で貴重な資料が確認された。

花巻市博物館では資料整理の後、同資料を平成29年度古文書講座（中級編）のテキストとして使用した。講座は10月15日、11月12日、12月3日の計3回で、江戸時代の東和地域における「漁業」・「成島和紙」をテーマとした。

本稿では、「成島毘沙門堂資料」のうち、古文書講座で取り上げた「漁業」・「成島和紙」の史料について紹介したい。

1. 資料概要

東和ふるさと歴史資料館所蔵「成島毘沙門堂資料」は、全体で299件856点の文書群である。

保存状態は、劣化したもの（虫損・鼠による汚破損）も一部見受けられたが、それ以外の資料は良好であった。そのうち、江戸時代の文書が68点、明治期の文書が31点、大正期の文書が46点であった。その他は昭和期のもの、昭和50年代までの資料である。年代が最も新しい資料は、昭和51年のもので、現在存命者の個人情報となる部分があるため、学術的使用においても注意が必要となる。

2. 漁業関係資料

まず、猿ヶ石川の概要について説明する。安俵高木通を貫流とする猿ヶ石川は、鮎・鮭・美濃魚（鯉）など、往古から淡水魚の宝庫として知られていた。『邦内郷村誌』の和賀稗貫二郡高木県産物には、「鮎・鮭・美濃魚（鯉）・ザク砥・紙類・紅花・温石・片栗粉」が挙げられ、その半分が魚類を占めている。また『南部史要』には、「鮎 稗貫郡猿ヶ石川名産なり、骨和かにして風味宜し、此地旧来、江刺氏采地

にして其頃献上これ有り、土沢村川筋総て宜しき由」と記されており、古来より猿ヶ石川は、鮎の名産地として知られていた。

「成島毘沙門堂資料」の内、漁業関係資料は、漁業願・許可に関する文書、冥加関係文書、河川絵図の3つに分類できる。まず、漁業願・許可に関する文書から取り上げる。



史料①『遣証文（築漁許可証文）』嘉永5年12月

遣証文

一、安俵通猿ヶ石川之内、成嶋村行人塚之下江築取立鮎漁并滑瀬下・行人塚築込、諸網漁共ニ当子ノ年・向辰年迄五ヶ年中奥御用築、御銘儀ヲ以被仰付被下置度、右取行中、為冥加年々御礼銭拾五貫文、大鮎三百本宛上納可仕旨、願出望之通申付候、尤不漁之節者、鮎壺本ニ付五拾文積ニメ代銭上納可申事、
但シ御礼銭之義者、年限中年々八月中上納可申事、
右之通申付候条、漁事中田畑川除江相障申間敷候、惣而猥ヶ間敷事無之様急度相守可申候、不依何義差支之節於有之者、証文可取上也、
嘉永五年十二月

直記
徳之輔
左膳
陽之輔
帯刀
伊辰郎
吉兵衛
土佐
典膳

江戸時代、河川にて漁業を行う際、藩（領主）より許可を受けることが必要であった。史料①は、藩が漁事に携わる者に対して出した、築漁の許可証文である。

史料①の内容は、猿ヶ石川の内、成島村行人塚下に新築を設置して鮎漁と、滑瀬下から行人塚築までの諸網漁を、子年から辰年までの5年間、定められた冥加（御礼銭と鮎）を上納することで、許可するというものである。

史料①から、まず猿ヶ石川における漁業の主体が築漁であることが確認できる。築は、川幅全体に簀を並べ立て、遡上する魚を留め、待網で捕獲する仕掛けである。鮎漁は一部投網や釣りもあるが、猿ヶ石川では、築で捕ることを常としていた。

また、築漁を行うに当たっては、1年ごとに、定められた冥加（御礼銭と鮎）を上納する必要がある。史料①では、1年につき御礼銭15貫文と鮎300本を上納することが築漁許可の条件となっている。



史料②『乍恐奉願上候事（築漁許可証文）』嘉永5年

乍恐奉願上候事

一、御入くわへ 錢拾五貫文
 右者御支配所安俵通
 猿ヶ石川筋、上者拾弍ヶ村
 滑瀬築下タ・下者北成嶋村
 行人塚下タ築留安俵村
 拾弍ヶ村御領地ニ付、川筋除
 南通り半川諸網漁とも、
 一ヶ年御礼銭拾貫文宛
 上納去ル寅年・当辰年
 まで三ヶ年中、漁事被
 仰付難有仕合奉存候、然処
 此度御領地御取戻ニ相成、
 御蔵御初之御沙汰御座候ニ付
 而者、未タ御年限中ニハ御座候
 得共、是迄之御礼銭拾貫文江
 五貫文御為増、都合右之通、
 年々二月十月奉上納候間、御
 領地被仰出、前之通拾弍ヶ
 村築下タ・北成嶋村行人
 塚下タ築迄、川筋不残諸網

漁共当辰年・午年迄、
 三ヶ年中漁事被仰付、
 御証文御書替被下置度、
 奉願上候、御慈悲之御憐愍
 を以、願之通被仰付被下置候ハ
 重疊難有仕合奉存候、
 乍恐此段奉願上候、以上、

史料②は、猿ヶ石川で漁事に携わる者が藩へ提出した築漁（継続）願である。

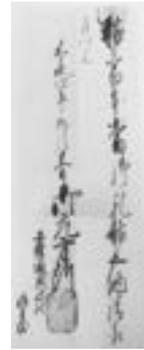
資料②の内容は、去寅年から当辰年までの3年間、1年に御礼銭10貫文ずつ上納して築漁を続けてきたが、今後も十二ヶ村築から北成島村行人塚下築までの諸網漁を継続したく、1年に御礼銭15貫文ずつの上納で漁事の許可を願ったものである。

史料②に年代は確認できないが、同史料に記載の「御礼銭15貫文」は、史料①の記載内容と合致するため、史料②も嘉永5（1852）年のものと推測できる。また、藩が史料②の築漁継続願を受けて、史料①の築漁許可を出したとも考えられる。

そして、冥加の内容を記した文書が史料③から史料⑥となる。これらは嘉永3年～6年に御元方所から安俵通成島村治兵衛宛に出された証文である。そのうち、史料⑥は、鮎が不漁で上納が困難なので、その代物として美鯉10本を上納している。



史料③



史料④



史料⑤



史料⑥

史料③ 冥加請取証文 (嘉永3年8月)
 史料④ 冥加請取証文 (嘉永4年9月12日)
 史料⑤ 冥加請取証文 (嘉永5年8月15日)
 史料⑥ 冥加請取証文 (嘉永6年8月15日)

史料③

覚
 一、三百本 鮎
 右者當御禮鮎上納、請取候、以上
 嘉永三年八月 御元方所 (印)
 安俵通成嶋村
 治兵衛

史料④

鮎三百本、當御礼鮎上納請取
 候、以上、
 嘉永四年九月十二日 御元方所 (印)
 安俵通成嶋村
 治兵衛

史料⑤

覚
 一、三百本 鮎
 右者當御礼鮎上納請取候、以上、
 嘉永五年八月十五日 御元方所 (印)
 安俵通成嶋村
 治兵衛

史料⑥

銭五貫文、安俵通成嶋村築当御礼美鯉
 拾本上納以不漁二付、代上納請取候、以上、
 嘉永六年八月十五日 御元方所 (印)
 安俵通成嶋村
 治兵衛

『猿ヶ石川絵図』の制作年代の記載は無いが、史料①に記載の「成島村行人塚下築」などが本絵図にて確認できるため、江戸後期のものと推測できる。

絵図の方角として、絵図上部が北、下部が南を示す。絵図中央部には、猿ヶ石川が描かれ、築留や舟渡所が付箋で明示されている。その周りには、村境や堰なども描かれている。また、枠で囲っている「成島村行人塚」⁽¹⁾は、付箋で明示されている他、やや大きく描かれているため、当塚は本絵図制作における1つの基準点になっていたと考えられる。

『東和町史 (上巻)』では、江戸後期における猿ヶ石川の築留として、蓬田築・小倉築・立沢築・大篠築・滑瀬築・矢崎築・行人塚下築・柵山築の8箇所設置されていたことが、関係文書から明らかとなっている。



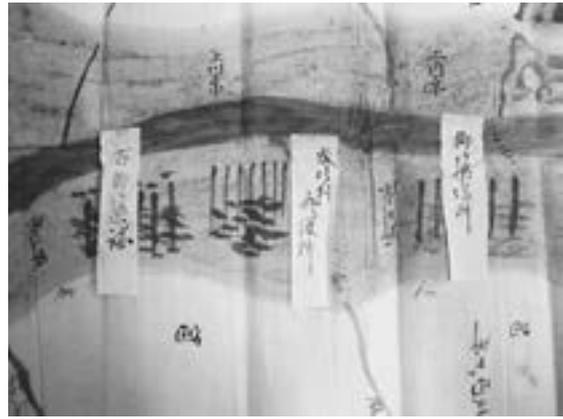
【図-1】江戸後期における築留位置図
 『東和町史 (上巻)』より引用



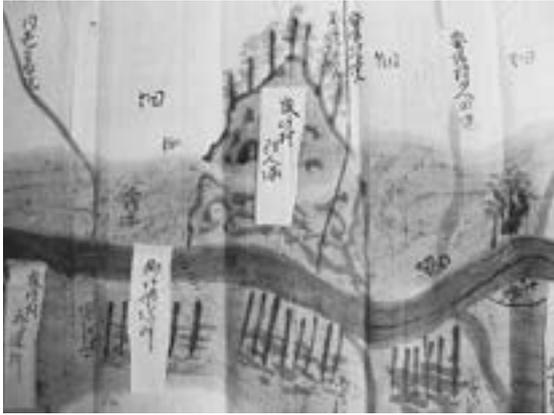
史料⑦『猿ヶ石川絵図』江戸後期 28cm×86cm

本絵図では、行人塚下築・矢崎築・滑瀬築の3箇所の築留位置のほか、「古御築跡」が確認でき、江戸後期に限らず、それ以前の築留位置も知ることができる。また舟渡場の位置も確認できることから、同絵図は東和地域における築漁だけでなく、河川交通を知る上でも貴重な資料である。

なお、【図-1】江戸後期における築留位置図の枠で囲った範囲が『猿ヶ石川絵図』の描かれた範囲に該当する。



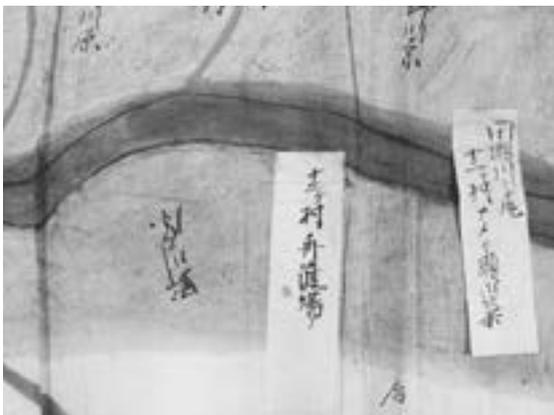
左) 古御築跡、中) 成島村舟渡所
右) 御築場所 (成島村行人塚下築)



御築場所 (成島村行人塚下築)



安俵村矢崎古築



左) 十二ヶ村舟渡場、右) 十二ヶ村滑瀬築

3. 成島和紙関係資料

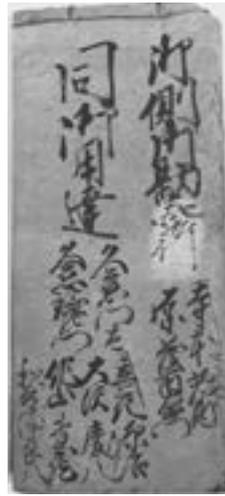
まず、成島和紙の概要について『東和町史(上巻)』を参考に説明する。花巻市東和町成島地区は、猿ヶ石川を挟み、南成島と北成島に分かれている。この地域は勾配が多く、水田の開拓よりも畑地で製紙の原料である「楮」を栽培していた。この楮と清流に恵まれた猿ヶ石川の立地条件が伴って、伝統的に和紙を生産するようになった。

成島和紙の起源に関しては、①延暦21(802)年、坂上田村麻呂が蝦夷征討をおこなった際に、この遠征に従った者の中に製紙技術をもった者がおり、この地に定着し、紙漉きを始めたという説(熊野神社に伝わる伝説)や、②嘉祥3(850)年頃から紙漉きが始められた(成島寺『本尊毘沙門堂縁起』)という伝承がある。

江戸時代に入ると、盛岡藩の御用紙のほか、一般の和傘用紙・提灯用紙・障子紙等の需要が多くなり、18世紀半ば頃、上方にのぼった北成島の職人が製紙技術を習得して帰り、地域の同業者に伝授して技術の向上を図ったとされている。

江戸時代に東和地域で製造されていた和紙の種類に関して『東和町史(上巻)』では、半紙・杉原紙・大方上紙・大方中紙・大方下紙・美濃紙・仙過紙・白切紙・鼠切紙が挙げられている。

「成島毘沙門堂資料」の内、成島和紙関係資料は、藩への御用紙上納に関する文書、1点のみである。



史料⑧『御用紙上納通』安政6年1月



- 一、三百六十文 仙過 四十八枚 一帖
- 一、百文 上大方 三十八枚 一帖
- 一、六十三文 下大方 三十枚 一帖
- 一、九百五十文 上之白切紙 千枚
- 一、九百文 并白切紙 千枚
- 一、五百三十文 鼠切紙 千
- 一、式十九文 并半紙 廿枚 一帖
- 一、三十一文 大蔵半紙 廿枚 一

(以下省略)

江戸時代の東和地域では、藩の要求によって多種の和紙が製造されていた。史料⑧は、安政6（1859）年に藩へ上納された成島製御用紙の種類や枚数を書き留めた帳簿（写）である。

史料⑧の見開きには、御側御用紙を申し付けられ、嘉永6（1853）年12月26日に初めて上納したこと、嘉永3（1850）年・4（1851）年の2年間、大納戸御用紙を上納したことなど、藩への御用紙上納の経過などが記載されている。

その続きには、上納した御用紙の値段、種類・枚数が列挙されている。御用紙の枚数に関して、枚数の下に記載されている「帖」は、出荷する際の単位を示す。従って「小判生紙 四十八枚 一帖」というのは、小判生紙48枚で一帖（＝1纏）という意味である。また、10帖で一束となる。

そして、史料⑧の御用紙の種類に『東和町史（上巻）』では、確認できていない「大蔵半紙」や「仙蔵紙」の記載がある。現時点で、これらの和紙が如何なるものか説明できないが、いずれにせよ、史料⑧は、江戸時代の東和地域において多彩な和紙が製造されていたことを示す貴重な資料といえる。

おわりに

本稿では、「成島毘沙門堂資料」のうち、江戸時代の東和地域における「漁業」・「成島和紙」に関する史料について紹介してきた。

- 一、御側御用紙被仰付
候事ハ、嘉永六年丑ノ十二月
廿六日、初而上納仕候、丑寅卯
辰巳午上納仕候得共、手
扣通帳書留不仕候ニ付、
安政六年上納仕候分・
書留申候、
- 一、大納戸御用紙嘉永三年
四年二ヶ年相勤申候得共、
在郷ニ而及不申候ニ付、御勘定
奉行、新戸部重次郎様、大納
戸奉行、宮建平様へ願上
内館や金助へ譲り申候、

安政三年辰三月廿八日、
御直段書上左之通

- 一、百七十文 小判生紙 四十八枚 一帖

漁業関係資料に関しては、漁業願・許可に関する文書、冥加関係文書、河川絵図の3種類の史料が確認された。これらの史料は、盛岡藩の冥加制度をはじめ、東和地域の築漁の実態、それから同地域における舟渡などの河川交通を知る上でも重要である。

また、成島和紙関係資料に関しては、藩への御用紙上納に関する帳簿のみであったが、江戸時代の東和地域において、多種多様な和紙が製造されていたことを示す貴重な資料といえる。

現在、花巻市では、東和ふるさと歴史資料館の閉館に伴って、東和町コミュニティセンターの移転整備に着手している。その状況の中、資料整理作業を通じて、漁業・成島和紙など、東和地域の村の生業を考える上で貴重な史料が確認されたことの意義は大きい。

「成島毘沙門堂資料」については今後、保管・活用の方向性を探っていきたいと考えているところである。

最後に本稿の執筆にあたり、古文書講座の参加者より東和地域の歴史に関する様々なご教示をいただいた。また資料の整理作業では当館の小田桐睦弥学芸員とともにやっている。この場で各位に感謝申し上げ、この稿を閉じることとする。

註)

1) 「成島村行人塚」に関しては、これまで場所や由来などが不明であった。そこで、平成29年度中に東和町在住の平野保氏が調査を行ったところ、北成島に行人塚と思われる2基の石碑が確認されたので、紹介したい。

2基の石碑は、いずれも旧家である熊谷家(屋号=越崎家)の所有地にある。

1基目の石碑は、北成島の菅原鉄工所前に位置する。石碑には「仙人山、明治13年」と刻まれている。熊谷家によると、「かつて石碑の両側に松の大木があり、松ぼ山と呼ばれていた、石碑の近くには猿ヶ石川が流れ、川近くの岩場には、かつて僧が修行をした跡(一坪程の石)があった、昔、修行僧が回ってきて、みそぎ、水行などして修行という伝承があり、私をはじめ、周りの人は、この石碑を行人塚と呼んでいる」という。

2基目の石碑は、1基目の石碑から200メートル余り西方向に位置する。

祠に囲われて2基の石碑があり、1つには「明和8年、正山養永信士」と刻まれている。

熊谷家によると、「昔、三味線も抱えた僧が「自分は流行病に罹り迷惑を及ぼすので、穴を掘ってくれたらその中でお経を唱えるので、埋めてくれ」という言い伝えがあり、そうした経緯からこの石碑を行人塚と呼んでいる」という。



【図-2】北成島の菅原鉄工所前に位置する石碑



【図-3】菅原鉄工所から200メートル余り西方向に位置する2基の石碑

参考文献

・『東和町史(上巻)』(東和町、1974年)

「Hanamaki」に関する国立国会図書館資料について

布 臺 一 郎

はじめに

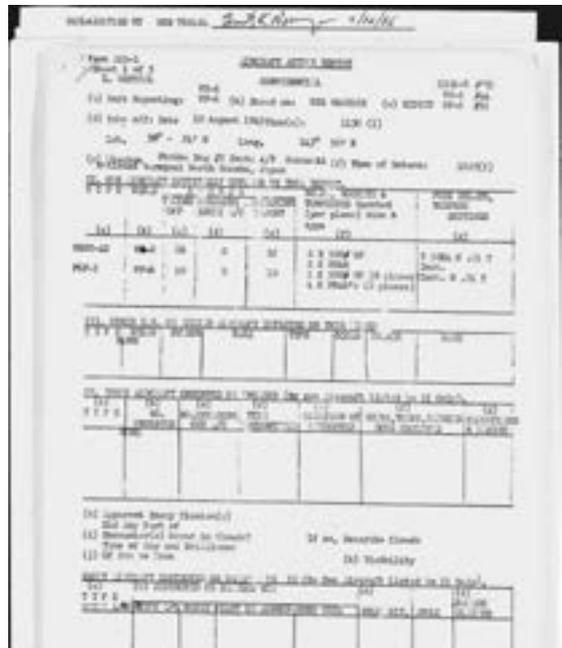
国立国会図書館憲政資料室では戦後日本占領に関するアメリカの公文書等を公開しており、その一部が国会図書館のホームページで検索することができる。ここには主に米国国立公文書館に原本が所蔵されている資料が電子化されて保存されている。この検索システムで「Hanamaki」という検索語で探してみると現時点で2件の資料が存在している。1件目は昭和20(1945)年8月10日の花巻空襲に関する「Aircraft Action Report」すなわち「艦載機戦闘報告書」であり、2件目は1946年5月8日付け民間情報教育局SCAPIN934号と附番されている「岩手県稗貫郡花巻中学校校長鈴木長の停職」という文書である。本報告ではこれら2件の公文書を紹介する。

1 艦載機戦闘報告書について

艦載機戦闘報告書は、米国戦略爆撃調査団文書(United States Strategic Bombing Survey, USSBS)に収められている公文書である。米国戦略爆撃調査団は、ルーズベルト大統領の指令をもとにスティムソン陸軍長官によって昭和19(1944)年11月に設置された米陸海軍の合同機関である。その活動目的は、米軍の行った戦略爆撃の効果や影響について調査して航空戦力の可能性を分析し、将来の軍事力整備に役立てることであり、その活動の一環としてアメリカ軍の戦闘報告書が収集されており、原本は米国国立公文書館に収蔵されている。

「Hanamaki」という検索語によってヒットした艦載機戦闘報告書によると、昭和20(1945)年8月10日午前11時30分、北緯38度24分、東経143度50分、すなわち仙台の東、約200キロメートルの太平洋上にあった米国海軍空母ハンコックから、ヘルダイバーと呼ばれる偵察爆撃機12機の部隊とF6Fヘルキャットと呼ばれるグラマン社製艦上戦闘機10機の部隊が離陸した。ヘルダイバーにはそれぞれ500ポンド(約227キログラム)爆弾2発と全長1.82メートル、重さ63.4キログラムのHVARロケット弾2発が積載され、ヘルキャット8機には500ポンド爆弾1発、残り2機にはHVAR

ロケット弾1発が積まれていた。任務は、日本の北本州、岩手陸軍飛行場、すなわち後藤野飛行場、花巻鉄道ターミナルの攻撃であり、攻撃部隊の22機全機が帰投し、その時刻は16:20と記されている。日本側からの対空砲火については岩手陸軍飛行場において、軽度と評価された貧弱な反撃があったことが記録されているが、花巻においては反撃なしと記されている。



艦載機戦闘報告書1ページ

この報告書には当初の攻撃目標は後藤野飛行場と記載されている。「戦隊ストライクドッグ5号は12機の爆撃機と戦闘機援護機を伴ったチェイス海軍少佐に導かれた。割り当てられた目標はB地区の西端の飛行場又はターゲットオブオポチュニティ(臨機目標)であった。攻撃する価値のある飛行場を発見できなかったため、フライトは花巻の鉄道の駅、構内及び近隣の建物をロケットと爆弾で攻撃することを成功させた。爆撃機が離れた後、艦載空雷機から3時間に亘って大火災があったと報告されている。」と書かれており、当初の攻撃目標である後藤野飛行場の代わりに臨機目標として花巻が攻撃されたことが明確に記され

ている。また、別の個所には「戦闘機は岩手飛行場をおよそ13時30分に攻撃し、地上の航空機を攻撃した。500ポンド爆弾3基が飛行場に投下され、7発のロケット弾が覆われた航空機に発射された。1機が燃えたが、他の飛行機も飛行場でそう見えたように、それはダミーの飛行機であった。運行可能な航空機が破壊されたり、損傷されたりしたとは考えられなかった。」とある。後藤野飛行場は前日の8月9日の空襲に続いて、8月10日の早朝から艦載機によって空襲され続けていた。空母レキシントンの艦載機は悪天候のため当初の攻撃目標である鶴岡攻撃を断念し、その代わりに酒田を空襲、引き続き後藤野飛行場を空襲したことが別の報告書に記されている。このように花巻空襲を実行した艦載機は、破壊され尽くした後藤野飛行場に行ったものの、既に攻撃の価値がないと判断し、花巻を空襲した。その攻撃の様子は次のように報告書に書かれている。

「海軍少佐のチェイスは鉄道の駅に爆弾を投下、ロケット弾を発射し、町の北東2マイルにある機関車に機銃掃射をした。」この位置情報から推測すると、この攻撃は釜石線似内駅の空襲と考えられ、ここで5名が犠牲となった。

「スミスは鉄道の列車と構内に爆弾を投下し、ロケット弾を発射した。ライレクスは鉄道の駅からおよそ500ヤード離れた建物に爆弾を投下したが、火災は観測しなかった。パークは鉄道の軌道に隣接する建物に爆弾を投下し、同じ場所でロケット弾を発射した。サマービルの爆弾は鉄道構内に当たった。ムーアはロケット弾を発射し、爆弾を建物に投下、機銃掃射をした。ジョンソンの爆弾はロケット弾と一緒に駅に当たった。彼と後部座席の者両方は町を機銃掃射した。ソートンはロケット弾で鉄道車両の駅を攻撃しそこだったが、爆弾を構内に落とす。彼は2回目の飛行で列車を機銃掃射した。彼の後部座席の者は照準を合わせることでできるもの全てに向かって機銃照射をした。ヒルスベックは爆弾で列車と軌道を攻撃した。彼は2回目の飛行でラジオ放送局にロケット弾を発射し、建物に当たった。彼と砲手の両方は建物と家々を機銃掃射した。彼は列車が吹き飛ばされて発火し、2回目の飛行で軌道が全て裂かれたことを観察した。リークは駅近くの倉庫を爆弾で攻撃し、町にロケット弾を発射した。彼と砲手の両方は機銃掃射をした。マロニーは町にある

大きな5階建ての建物を爆弾で攻撃し、他の建物にロケット弾を発射した。彼と後部座席の者は機銃掃射をした。花巻町では戦闘機と爆撃機が鉄道の駅、鉄道機関車と列車を攻撃した。爆弾1発が投下された。海軍少尉のA.ニールソンの爆弾投下は軌道の大きな部分を破壊した。他のパイロットたちは全部で15発のロケット弾と無数の50弾径の弾薬を機関車と列車に発射した。機関車2台が燃え、鉄道の駅は煙が立ち込めたままとなり、電気機関車がひどい損傷を受けた。」

なお、下記の2で紹介する旧制花巻中学校の鈴木長（すずきひさし）校長は同窓会誌である桜雲四十五年史において花巻空襲を次のように記述している。

「学校前に半トン爆弾投下、花中校長室には機銃掃射の銃痕が机を斜めに床まで貫いていた。開墾作業で他へ出動中だったので命拾いをしたわけ。また花巻駅前に落とされた爆弾の風圧で巨木のきれはしがふきとび、私の住宅玄関直上に落下した。そこから1メートル離れた押入れには、家族5人がひそんでいた。まさにひや汗ものだった。」

艦載機戦闘報告書に明示されていないが、実はこのとき花巻中学校の講堂は軍用機を生産していた中島飛行機の第181工場として使用されており、「剣」という戦闘機が組み立てられていたことがやはり桜雲四十五年史に記録されている。米軍がこの事実を知って、花巻中学校を攻撃したのか否かは現時点で分かっていない。

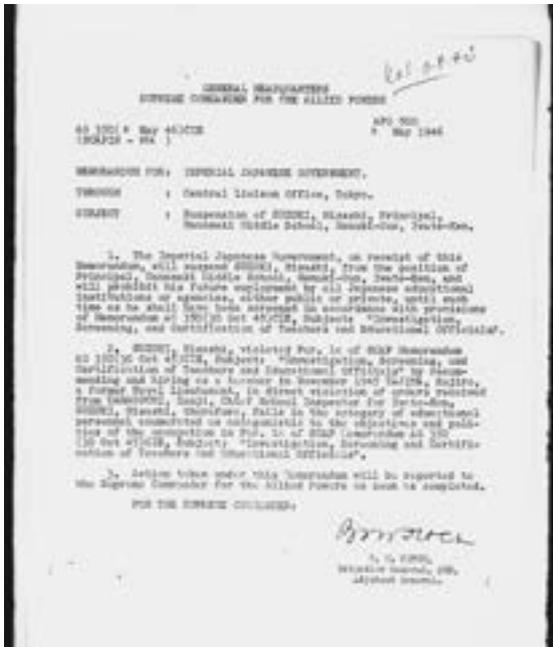
花巻空襲の被害、特に犠牲者数については未だ正確さを欠いている状態であるが、焼失家屋673戸、倒壊家屋61戸、死者42名、負傷者約150名という記録があり、花巻は終戦の5日前に焼け野原となった。

2 SCAPIN934号「岩手県稗貫郡花巻中学校校長 鈴木長の停職」について

さて、「Hanamaki」に関する2件目の資料は連合国最高司令官指令、略称「SCAPIN」と呼ばれる指令の中にある。SCAPINとは連合国最高司令官（SCAP：Supreme Commander for the Allied Powers）が出す指令の略であり、当該指令に係る文書にはSCAP Index Numberと呼ばれる番号が「SCAPIN-○○」という形で付されることから「SCAPIN」（スキャップイン）と通称される。第二次世界大戦の戦後処理において、アメリカ合衆国が主導する連合

国軍最高司令官総司令部（GHQ / SCAP、日本では通称「GHQ」）より様々な指令が出された。その内容は検閲（日本における検閲）の規定、国旗掲揚の許可、漁業権の範囲を定めるもの、農地改革、など多岐に渡る。それらの目的は日本から国家主義と軍国主義を一掃することとされている。SCAPINは、昭和20(1945)年9月2日のSCAPIN-1から昭和27(1952)年4月26日のSCAPIN-2204まで出された。昭和27(1952)年4月28日、日本国との平和条約（サンフランシスコ講和条約）の発効に伴い、一部の特別な協定の結ばれたものを除き失効した。

この指令の934番に岩手県稗貫郡花巻中学校長 鈴木長氏の停職に関するものがあった。鈴木長氏は先に花巻空襲の様子を描写した第4代の校長である。2204番まであったSCAPINの中にはいわゆる公職追放の指令もあるが、岩手県人でこのSCAPINによって公職追放の指令を出されたのは鈴木長校長のみと見られ、この指令は極めて異例なものと思われる。以下にSCAPIN934号の和訳を示し、内容を見てみる。



SCAPIN934号

(和訳)

1946年5月8日 民間情報教育局SCAPIN934号
日本帝国政府への覚書
終戦連絡中央事務局経由
題目：岩手県稗貫郡花巻中学校校長鈴木長の停職

この覚書を受領した日本帝国政府は花巻中学校長の職から鈴木長を停職させるものとし、1945年10月30日付け、民間情報教育局のAG350覚書、題目「教師及び教育職員の取調べ、検査及び認定」の条項に従って検査される時期まで、公立であれ私立であれ、日本の教育機関の全てによる将来の雇用を禁ずる。

鈴木長は1945年11月、海軍大尉であった田島幸次郎を教師として推薦、雇用したことによって、1945年10月30日付け、民間情報教育局のSCAP覚書、AG350号、題目「教師及び教育職員の取調べ、検査及び認定」第1条c項に違反し、岩手県主任学校視察官山口善次から受けた命令に直接違反し、よってSCAP覚書、AG350号、題目「教師及び教育職員の取調べ、検査及び認定」第1条a項にある占領の目的及び政策に敵対するものとして列挙されている教育職員に該当するものである。この覚書によって取られる行為は、終了し次第直ちに連合国軍最高司令官に報告されるものである。

最高司令官 あて

副参謀 准将 B.M.フィッチ

この指令の背景はどのようなものであっただろうか。上述の花巻空襲の様子を引用した鈴木校長の文章には次のように書かれている。

「教員組織の強化については、苦勞の連続だった。3年間に教頭、訓育主任が何れも3人ずつかわり、また戦争のし烈化にともない、教師の応召相つぎ、その補充汲々たる有様だった。自分なりに各方面に手をのぼし、良教師を得ることに四苦八苦しながらも、人材をある程度確保できたのは幸いだった。花中では盛岡高等農林畜産科への志望者が多く、生物の評価がないと入学出来ない恐れもあるのに、生物担任教師が応召したり、終戦後退職する者があつたりして、その穴埋めにほとんど弱りぬいていた。幸い東北大理学部生物学教室に、副手をしていたT君を、県の諒解の下に臨時に仮講師にお願いしたのだが、同君が海軍予備将校だったことから、私は占領政策に違反したということで、教職追放になったのである。」

上述の文中で「T君」とあるのはSCAPIN934号に明記されている海軍大尉であった田島幸

次郎氏を指しているものと思われる。

ところで、このSCAPIN934号が指令された昭和21(1946)年5月8日、鈴木校長は花巻中学校長ではなかった。鈴木校長は昭和21(1946)年3月31日付けで岩手県立黒沢尻中学校長として転出している。黒陵八十年史によれば鈴木長校長は第9代校長として昭和21(1946)年4月に着任したことを確認できるが、この資料では就任期間が棒線によって示されており、正確な就任期間がわからず、その棒線は2か月程度で途切れ、次の第10代斉藤武志校長が昭和22(1947)年4月に着任するまで校長は不在の状態となっている。このことからSCAPIN934号が指令されて間を置かず転出先の黒沢尻中学校長の職から停職の処分となったことがわかる。

さて、当時の生徒たちが鈴木校長や教師たちをどのように見ていたのかを知ることができる記述が桜雲四十五年史の「桜雲台に繰り広げた劇(ドラマ)」と題する文章にある。「墨をすり筆にふくませて教科書の一頁一頁を開かせられ、指示された超国家主義的、軍国主義的、戦争犯罪的とかいうところを、墨黒ぐると塗らせられたのであった。(中略)見慣れない自動車ジープが一台のぼってきた。進駐軍だ、外人兵。(中略)まもなく靴をはいたまま、機関銃だかピストルだかをかまえて、突然数人わが教室に入ってきた。校長は上手な英語で落ち着いてにこやかに興奮気味の彼らを案内していた。「フフン」というような声を出し、了解したらしく彼らは去っていった。私はアッケにとられた!あまりにも突如米兵の来訪はもちろんだが、それよりもその校長先生の落ち着いた、にこやかな笑顔と対応、なめらかな英会話ぶりに。(さっきまで、鬼畜米英打倒、神国日本不滅を叫んでいたのに…) (中略)誰からともなく「校長は、上級生のストライキで追放されたそうだ」ということを耳にしてから、たしかに新しい校長にかわった」

この文章からは、軍国主義一辺倒で、学校舎で戦闘機までを作っていたような時代が終戦によって一変し、その激変によって混乱している生徒たちの様子をうかがい知ることができ、鈴木校長の文章と合わせると、教員組織の強化に心を砕いていた教師とその教師に不信を抱いていた生徒たちとの意識のすれ違いを生々しく感じることができる。

なお、鈴木長校長は停職となってから10年

後、岩手県立盛岡第一高等学校の第19代校長として、昭和31年4月から昭和34年9月まで勤務されていることが同校のホームページから確認できる。停職から10年間、どのような期間であったのだろうか。

おわりに

膨大な情報がインターネット上に記録され、検索できる状態になっている現代にあって、一次史料として様々な言語で記録されている記事を容易に閲覧できるようになったことは歴史を調べる上で非常に有益で有効な手段を得たと感じている。公文書の保存に関してはその方法や分量において欧米が先んじているが、新聞記事を電子媒体で保存し、閲覧に供していることでも同様の状況である。幕末以降については欧米の新聞記事にも日本の出来事が記録されており、一つの歴史的事象を異なった言語と異なった視点で観察することも可能となっている。今回の報告は太平洋戦争に関する花巻の情報を米国側の公文書記録から検索、入手して紹介したものであり、花巻空襲が臨機目標の攻撃の趣旨であったとの記載や鈴木校長の公職追放の具体的理由など、この資料によって初めて明らかとなった事柄もあった。今後の歴史研究の一方法として留意していただければ幸いである。

参考文献

- ・岩手県立花巻北高等学校(1980)『桜雲四十五年史』岩手県立花巻北高等学校
- ・黒陵八十年史編集委員会(2004)『黒陵八十年史 向上の一路』岩手県立黒沢尻北高等学校創立八十周年記念事業協賛会
- ・Aircraft Action Report No.CAG 6 #50 VB6 #44 VF6 #91 1945/08/10 : Report No. 2-d(33) : USS Hancock, USSBS Index Section
- ・SCAPIN-934 : SUSPENSION OF SUZUKI, HISASHI, PRINCIPAL, HANAMAKI MIDDLE SCHOOL, HENUKI-GUN, IWATE-KEN 1946/05/08
- ・岩手県立盛岡第一高等学校(2017)「学校概要」<http://www2.iwate-ed.jp/mol-h/about/idea.html> 2017年10月6日アクセス
- ・ウィキペディア(2017)「SCAPIN」<https://ja.wikipedia.org/wiki/SCAPIN> 2017年10月6日アクセス

や え がしほうたく 八重樫豊澤作品の制作年代の考察

— 落款と印章から —

小原伸博

はじめに

当館ではこれまで「花巻の三画人展」と題して、小野寺周徳、八重樫豊澤、橋本雪蕉の画人の作品を紹介する展覧会をしてきた。

近年、豊澤の作品収集が進んでおり、現在約80点の屏風や掛軸を所蔵している。そこで、当館で所蔵する豊澤の作品を改めて見直し、落款、印章はどんなものを使用していたのか確認するとともに、制作年の特定となる手掛かりを探りたいと考えている。また、多くの作品を残しているため、どの時期の作品が現存しているのかも併せて確認した。

I 花巻地方の絵画の先人 八重樫豊澤

豊澤は、宝暦13(1763)年に生まれ、幼名は豊次郎、のちに兵蔵と改名し、字を藤明、藤明、子明といい、豊澤のほか彭澤處士、臥牛散人、孤山、駒岳仙人、盤遊亭などの雅号を用いた。

豊澤の書は、川口町で寺子屋を営んでいた父譲りの達筆で、子どもたちに読み書きを教えたほか、求めに応じて手紙の手本を書いたりした。豊澤は4歳年上の周徳に絵を学んで、30代の寛政年間(1789～1801)から作品を残している。その後養子に迎えた堅治(1794～1837)に寺子屋の経営を任せて画業三昧の生活に入り、多くの作品を残した。

豊澤の交友関係は、谷文晁、菅井梅関をはじめ多くの文人墨客との交流が知られ、門人には橋本雪蕉、菅原黒川、森川孫市や娘の豊谷、孫など家族にも教えていた。晩年は剃髪して出家姿をしていたと伝えられている。

豊澤の作品は山水図、人物図、花鳥図など多岐にわたっているが、中でも得意としたのは、中国の仙人や七福神などの人物画であった。70歳以降の作品の中には簡潔な中にも力強い筆線が見られ、豊澤の画風を特徴づけている。天保13(1842)年9月に80歳で亡くなる。略歴は別表1のとおり。

II 制作年代の考察について

豊澤は干支(十干と十二支を組み合わせた60を周期とする数詞)を書いている作品が多

くあり、制作年も特定しやすい。今回はまず、干支等をもとに制作年がわかる作品を30代、40代、50代、60代、70代に分類していった。制作年がわからない作品は年代不詳という分類にし、同一の落款、印章順にまとめた。年代不詳ではあるが、画風や字体の特徴、落款、印章を手掛かりに、同年代と予測されるものもあったので、その作品は各年代へ分類した(別表2の一覧参照)。

三画人の中ではかなりの所有数になる。これは、永く花巻や県内に居住し、たくさんの人たちと交流していたことや、寺子屋を息子に任せ、自分は画業三昧という生活をし、多くの作品を描いていたということ、そして、この時代では長生きで晩年まで絵を描き続けたことなどが挙げられる。

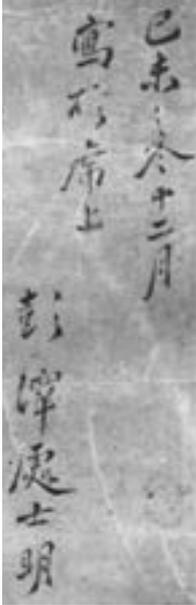
それでは下記から、番号、作品名、落款、印章の順に記述し、後段に画像データを掲載していく。作品の画像は省略した。別表2の一覧番号と作品名の頭にある番号、画像データの頭にある番号は一致する。落款が長い場合は分けて掲載し、不明な文字は●で記した。

III 30代の作品について

30代は3点確認された。1「梅に鳥図」の落款『彭澤處士明』、印章『藤明之印』(白文)、『高陽酒徒』(白文)。2「諸葛孔明図」の落款『彭澤處士明』、印章『藤明』(白文)、『子明』(朱文)。どちらも寛政11(1799)年の冬、同じ時期に描かれた作品で、諸葛孔明図は花巻市の指定文化財に選定されているものだ。年紀が記載された作品で、最も古い2点である。

次に3「蝦蟇仙人図」の落款は『彭澤處士藤明製』、印章はない。この字「彭」は、初期の作品に多く使用していたのでこの時期と推測した。

1

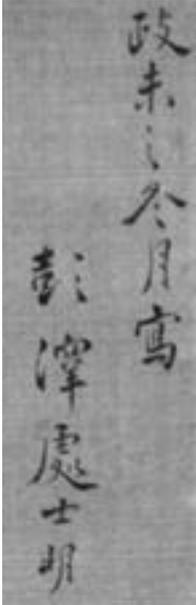
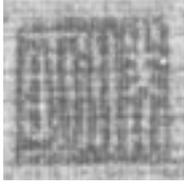



之 滕
印 明



酒 高
徒 陽

2

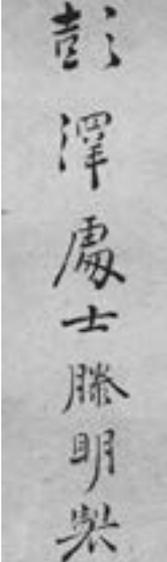



明 滕



明 子

3

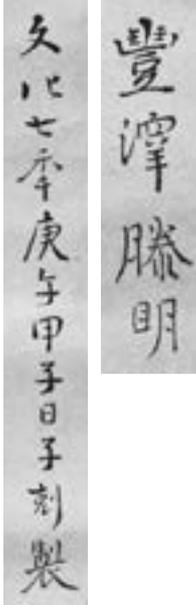


IV 40代の作品について

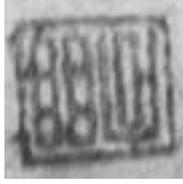
40代はつぎの2点確認できた。4「大黒天図」の落款は『豊澤滕明』、印章『滕明』(白文)『子明』(朱文)。文化七季^{かのえうまきのえね}庚午甲子日子刻製と書かれている。庚午は、文化7年なのでこの年の作品になる。さらにここには甲子ともあるが、制作年を書いたものではなく、大黒天を祀る行事、きのえねまつりをさす。甲子の日の夜、子の刻まで起きて語り合い、大豆や黒豆、二股大根を供え、大黒天を祀り、日の出を待つときに飾った作品である。

次に5「寿老人図」の落款は『豊澤滕明』、印章『滕明』(白文)、『子明』(朱文)、『盤游主人』(白文)。落款の『豊澤滕明』や『滕明』、『子明』の印章を使用していたのでこの時期と推測した。

4




明 滕

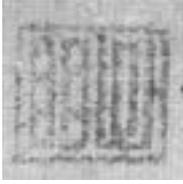


明 子

5




明 滕



明 子



主 盤
人 游

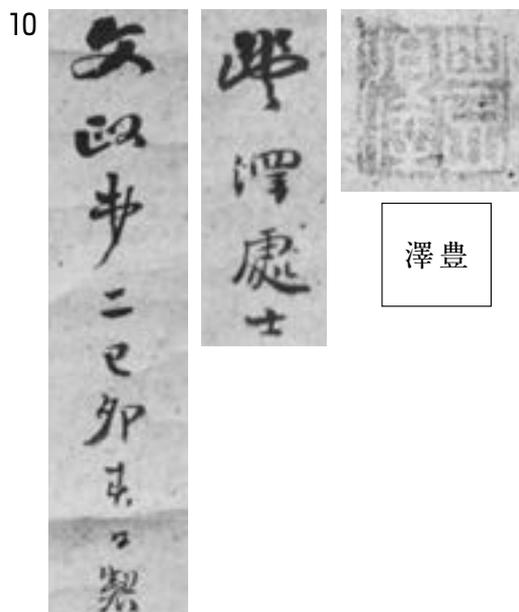
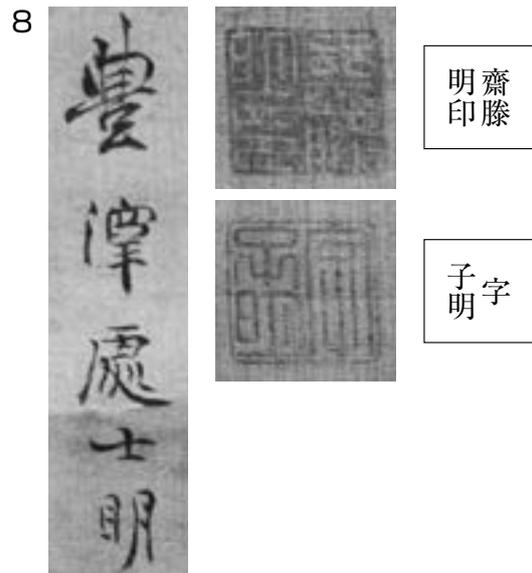
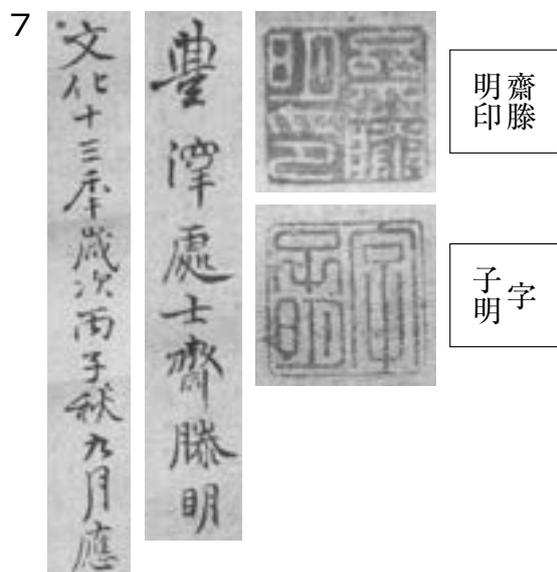
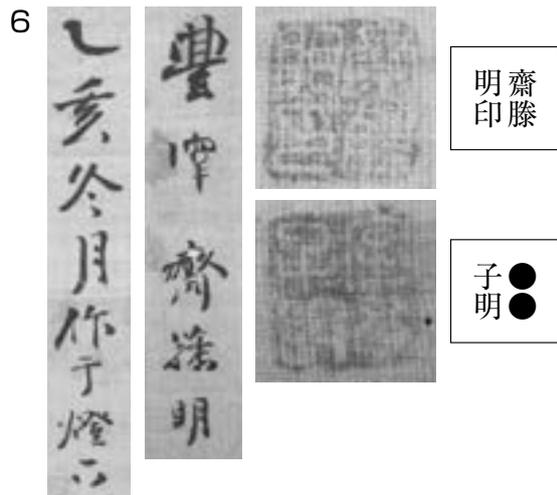
V 50代の作品

50代の作品は6点確認することができた。

6「三笑図」の落款は『豊澤齋滕明』、印章は『齋滕明印』（白文）、『●●子明』（白文）。7「山水図」の落款は『豊澤處士齋滕明』、印章『齋滕明印』（白文）、『字子明』（朱文）。8「山水図」は7「山水図」と対の作品で、こちらの落款は『豊澤處士明』、印章は同じ。9「山水図」の落款は『豊澤滕明』、印章『齋滕明印』（白文）。10「鍾馗図」の落款は『豊澤處士』、印章は『豊澤』（白文）、11「山水図」の落款は『豊澤漁夫』、印章は『豊澤』（白文）。

9「山水図」をこの頃とした理由として、豊澤の字体と印章から推測した。

朱文印の『字子明』は7と8の二幅対の「山水図」と2「諸葛孔明図」、4「大黒天図」、5「寿老人図」の5点にしか見られないので、寛政の終わりから文化年間に使用していたものと思われる。



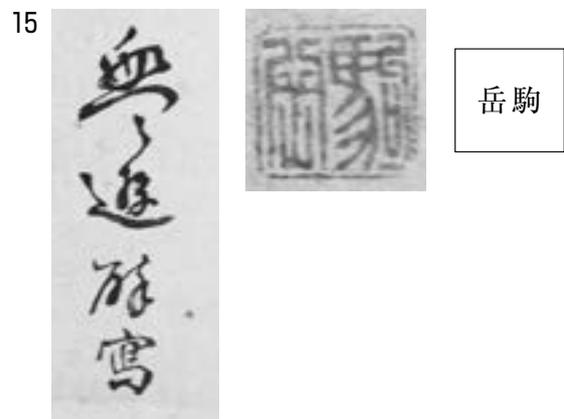


VI 60代の作品

12「李白図」の落款は『豊澤漁夫』、印章『豊澤』（白文）。13「人物図」の落款は『豊澤處士齊藤明』、印章『藤實明印』、『豊澤』（どちらも白文）。14「寿老人図」の落款は『豊澤製』、印章『藤實明印』、『豊澤』（どちらも白文）。15「饅頭山図」の落款は『盤遊醉写』、印象『駒岳』であった。16「鍾馗図」の落款は『豊澤』、印章『駒岳』。

10「鍾馗図」と11「山水図」、12「李白図」、13「人物図」、14「寿老人図」に『豊澤』の印章が使用されていた。これは、文政期に多く見受けられる印章であった。

さらに『駒岳』の印はほとんど見受けられないので、この2点は同年代の可能性がある。



16



岳駒

また、『滕實明印』（白文正方印）もあり、正方印と長方印を使い分け、さらには、正方印もサイズが違う印も確認できた。

サイズが違うものでいうと、度々使用している『豊澤』（白文）についても数種類存在した。

36「松虎図」と37「蔡瓊真人像図」の印章は共に『豊澤七十七之画印』で、77歳に描かれた作品ということがわかる。豊澤は天保13年、80歳で亡くなるが、年紀がわかる落款、印章は77までしか確認されていないため、77歳の作品が最晩年のものといえる。今後78や79という落款印章が実在したら、新発見となるだろう。

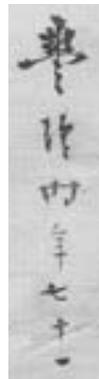
Ⅶ 70代の作品

現在確認されている豊澤の作品は、干支と季節で制作年代を記していたが、70歳を迎え心境の変化があったのか、年齢も書き加えるようになる。ここでは、落款に年齢が書いている作品を中心に紹介していく。17「寿老人」の落款は『豊澤時年七十一』、印章『滕實明印』（白文長方印）。19「天神図」の落款は『豊澤滕明盤季秀拝写 時年七十三』、連印『豊（白）・澤（白）』。21「咏婦之図」の落款は『豊澤滕明時年七十三』、印章『滕實明印』（白文長方印）。22「蝦蟇仙人図」の落款は、『豊澤時年七十三』、印章『華牧之人滕明』（朱文）。23「兎図」の落款は、『豊澤時年七十四』、印章『華牧之人滕明』、遊印か？『豊澤』（白文）。27「三傑図」の落款は、『豊澤時年七十四』、印章『滕實明印』（白文）、『豊澤』（白文）。33「人物図」の落款は、『豊澤時年七十五製』、印章『華牧之人滕明』（朱文）。35「萬歳図」の落款は、『天丑孟春写時年七十七 豊澤斎藤明』、印章『滕實明印』（白文正方印）。36「松虎図」の落款は、『滕明』、印章『豊澤七十七之画印』（白文）。37「蔡瓊真人像図」の落款は、『豊澤』、印章『豊澤七十七之画印』（白文）であった。

『華牧之人滕明』（朱文正方印）は、22「蝦蟇仙人図」、23「兎図」、24「鍾馗図」、25「俳聖図」、26「鍾馗図」、33「人物図」の6点で確認された。天保6年からの作品に押されているので、26「鍾馗図」はこの3年の間の作品と考えられる。

次に、『滕實明印』（白文長方印）だが、16点確認できた。天保4年作の17「寿老人図」から天保10年作の35「萬歳図」まで使われていた。年代不詳である38「梅に鶴図」から52「俳聖図」にも『滕實明印』（白文長方印）が押されているので、天保4年から天保10年の頃の作品と考えられる。

17



滕實明印

19



豊

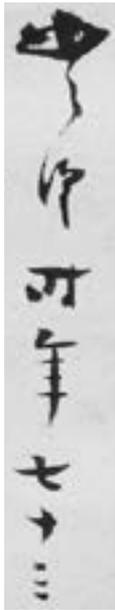
澤

21

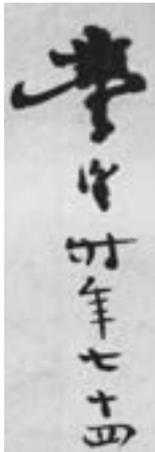
實滕印



22



23



27



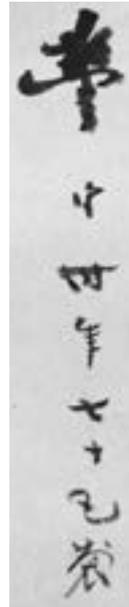
滕之華明
人牧



澤豊



33



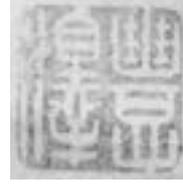
35



36



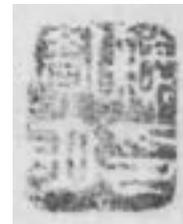
實滕印



澤豊



滕之華明
人牧



實滕印



豊澤七十
之画印

37



豊澤七十
之画印

VIII まとめ

- 年紀のある作品で最初に見られるのが、「彭澤處士明」で寛政11年の1「梅に鳥図」、2「諸葛孔明図」にあり、寛政年間のみで使用されていた。年代不詳だった3「蝦蟇仙人図」の落款「彭澤處士滕明」だが、「豊」ではなく「彭」の字を使用していることから同年代と推測される。
- 9「山水図」は、豊澤の字体と印章からこの頃と推測した。
- 朱文印の『子明』は2「諸葛孔明図」、4「大黒天図」、5「寿老人」、7と8「山水図」の5点にしか見られないので、寛政の終わりから文化年間に使用していたものと思われる。
- 『豊澤』（白文）が押された、10から13は文政に描かれたもので、『豊澤』（白文）は文政以後のものである。さらに、サイズも数種類存在する。
- 落款の「豊」の字が大きく書かれているが、豊澤は年を取るにつれ、「豊」の字が大きくなり形が乱れていくという特徴があった。
- 『華牧之人滕明』（朱文正方印）は、22「蝦蟇仙人図」、23「兎図」、24「鍾馗図」、25「俳聖図」、26「鍾馗図」、33「人物図」の6点で確認された。天保6年からの作品に押されているので、26「鍾馗図」はこの3年の間の作品と考えられる。
- 『滕實明印』（白文長方印）だが、16点確認できた。天保4年作の17「寿老人図」から天保10年作の35「萬歳図」まで使われていた。年代不詳である38「梅に鶴図」から52「俳聖図」にも『滕實明印』（白文長方印）が押

されているので、天保4年から天保10年の頃の作品と考えられる。

- 『滕實明印』（白文正方印）もある。正方印と長方印を使い分け、正方印のサイズが違う印も確認できた。
- 36「松虎図」と37「蔡瓊真人像図」の印章は共に『豊澤七十七之画印』で、77歳に描かれた作品ということがわかる。豊澤は天保13年、80歳で亡くなるが、年紀がわかる落款印章は77までしか確認されていないため、77歳の作品が最晩年のものといえる。

豊澤は多くの落款、印章を持っており、いろんな組み合わせで使用していた可能性が高い。印章は意外と同じ時期でまとまって使用していたが、落款は26種類と多様であった。

IX 課題

『臥牛』の印を押した作品も見受けられたが、いつの時代に使用していたのか判断できなかった。『豊』（白文）『澤』（朱文）、『滕』（白文）『明』（白文）の連印についても同様である。

これだけの作品数を所有しているので、紀要に記載したことや、八重樫豊澤の書画に長けた作品を展覧会等で紹介し、花巻の三画人のひとりを顕彰していきたい。

最後に、当館へご寄贈いただいた方々へ心から感謝を申し上げます。

参考・引用文献

- ・『花巻の三画人—周徳・豊澤・雪蕉—』
(昭和60年3月 花巻市教育委員会)
- ・『第2回企画展 八重樫豊澤』
(平成4年2月 花巻新渡戸記念館)

八重樫 豊澤 略年譜

別表1

年 代	出 来 事
宝歴13年 (1763)	八重樫善兵衛の子として出生。通称は豊次郎のち兵蔵と称す
寛政11年 (1799)	「諸葛孔明図」、「梅尾長鳥図」を描く。いずれも雅号に彭沢を用いる
享和元年 (1801)	「梅に鳥図」を描き、雅号の豊沢を用いる
文化6年 (1809)	父善兵衛死去（享年90歳）
文化9年 (1812)	川口町の規約である「郷約法律」を浄書する
文化11年 (1814)	花巻の俳人、伊藤鶏路の肖像画を描く
文政5年 (1822)	「李白酔狂図」を描く（画賛は盛岡の豪商・小野栗野）
天保7年 (1836)	館小路の松川家の板戸に、竹林七賢人・雲竜・山水図を描く
天保8年 (1837)	養子で寺子屋経営を一任していた堅治が死去（享年44歳）
天保13年 (1842)	9月、80歳で死去。菩提寺は瑞興寺

花卷市博物館所蔵 八重樫豊澤 落款印章一覽

別表2

年代	番号	登録番号	作品名	制作年	干支等	落款	白文印	朱文印	遊印・肖形印・連印
30代	1	1508	梅に鳥図	寛政11(1799)	己未之冬十二月 寫於席上	彭澤處士明	藤明之印		高陽酒徒
	2	14875	諸葛孔明図	寛政11(1799)	寛政未之冬月寫	彭澤處士明	藤明	子明	
	3	19236	蝦蟇仙人図			彭澤處士藤明製			
40代	4	19239	大黒天図	文化7(1810)	文化七季庚午甲 子刻製	豊澤藤明	藤明	子明	
	5	33409	寿老人図			豊澤藤明	藤明、盤遊主人	子明	
50代	6	33432	三笑図	文化12(1815)	乙亥冬月作干燈 下	豊澤齋藤明	齋藤明印、 子明 ●●		
	7	25254	山水図	文化13(1816)	文化十三季歲次 丙子秋九月迄	豊澤處士齋藤明	齋藤明印	字子明	
	8	25255	山水図	文化13(1816)		豊澤處士明	齋藤明印	字子明	
	9	11232	山水図			豊澤藤明	齋藤明印		
	10	15770	鍾馗図	文政2(1819)	文政初二巳卯● ●製	豊澤處士	豊澤		
	11	19242	山水図	文政2(1819)	巳卯初夏製於盛 岡偶居中	豊澤漁夫	豊澤		
60代	12	1500	李白図	文政5(1822)		豊澤漁夫	豊澤		
	13	33433	人物図	文政6(1823)	文政六季・次癸 未初冬	豊澤處士齊藤明	藤實明印(正方印)、 豊澤		
	14	33410	寿老人図			豊澤製	藤實明印(正方印)、 豊澤		
	15	25258	饅頭山図	文政7(1824)		盤遊醉寫		駒岳	
	16	24918	鍾馗図			豊澤		駒岳	
70代	17	26	寿老人図	天保4(1833)		豊澤時年七十一	藤實明印(長方印)		
	18	24778	二仙図	天保6(1835)		藤明時年七十三			
	19	25259	天神図	天保6(1835)		豊澤藤明盤季秀拜 写時年七十有三			豊(白)・澤(白)
	20	24783	蝦蟇仙人図	天保6(1835)		時年七十三豊澤	藤實明印(長方印)		
	21	11233	咏婦之図	天保6(1835)	丙申夏日製手上 毛泷川客年燈下 為茶岡大●手	豊澤藤明時年 七十三	藤實明印(長方印)		
	22	9	蝦蟇仙人図	天保6(1835)		豊澤時年七十三		華牧之人藤明	
	23	15597	兔図	天保7(1836)		豊澤時年七十四		華牧之人藤明	豊澤
	24	24780	鍾馗図	天保7(1836)		豊澤時年七十四		華牧之人藤明	
	25	19235	俳聖図	天保7(1836)		豊澤居士藤明時年 七十四秋寫		華牧之人藤明	
	26	8	鍾馗図			豊澤藤明		華牧之人藤明	
	27	32582	三傑図	天保7(1836)		豊澤時年七十四	藤實明印(正方印)、 豊澤		
	28	33408	寿老人図	天保7(1836)		豊澤時年七十四	藤實明印(長方印)		
	29	19238	鍾馗図	天保7(1836)		豊澤時年七十四製	藤實明印(長方印)		
	30	19169	人物図	天保8(1837)		豊澤時年七十五	藤實明印(長方印)		
31	24788	鍾馗図	天保8(1837)		豊澤時年七十五	藤實明印(長方印)			

年代	番号	登録番号	作品名	制作年	干支等	落款	白文印	朱文印	遊印・肖形印・連印
70代	32	25020	山水図	天保8(1837)		豊澤藤明時年七十五	藤實明印(長方印)		
	33	11234	人物図	天保8(1837)		豊澤時年七十五製		華牧之人藤明	
	34	593	鍾馗図	天保9(1838)	天保九季*・次戊戌●●製	豊澤時年七十三	藤實明印(正方印)		
	35	19241	萬歳図	天保10(1839)	天丑孟春写時年七十七	豊澤齋藤明	藤實明印(長方印)		
	36	24781	松虎図	天保10(1839)		藤明	豊澤七十七之画印		
	37	24789	蔡瓊真人像図	天保10(1839)		豊澤	豊澤七十七之画印		
	38	14876	梅に尾長鳥図			豊澤	藤實明印(正方印)		
	39	25256	山水図			豊澤	藤實明印(正方印)		
	40	19237	西王母図			藤明	藤實明印(正方印)		
	41	11236	仙人図			豊澤齋藤明	藤實明印(正方印)		
	42	11235	山水図			寫藤明	藤實明印(正方印)	号駒岳	
	43	1503	蝦蟇仙人図			豊澤藤明		号駒岳	
	44	1504	梅に鶴図			豊澤	藤實明印(長方印)		
	45	19244	観瀑図			豊澤	藤實明印(長方印)		
	46	10	煎茶美人図			豊澤藤明	藤實明印(長方印)		
	47	15594	仙人図			豊澤藤明製	藤實明印(長方印)		
	48	17309	山水図			豊澤藤明製	藤實明印(長方印)		
	49	25252	恵比寿図			藤明	藤實明印(長方印)		
	50	25253	大黒天図			藤明	藤實明印(長方印)		
	51	19243	山水図			豊澤老夫	藤實明印(長方印)		
52	4654	俳聖図			豊澤書画	藤實明印(長方印)			
不詳	53	753	拾得図			臥牛	臥牛居士		
	54	25257	東方朔図			盤遊主人藤明酔中筆	花卷藤明		
	55	32938	萬歳図			豊澤	藤實明印(長方印)		
	56	344	蘇鉄図			豊沢漁者			豊(白)・澤(朱)
	57	14350	豊干禪師図			豊澤			豊(白)・澤(朱)
	58	19240	松下高士図			豊澤			豊(白)・澤(朱)
	59	24920	草花図			豊澤			豊(白)・澤(朱)
	60	859	鍾馗図			豊澤處士齋藤明寫			豊(白)・澤(朱)
	61	432	隠士図			豊澤處士藤明作			藤(白)・明(白)
	62	4590	寒山拾得図			豊澤藤明製			藤(白)・明(白)
	63	1501	鉄拐仙人図			藤明			藤(白)・明(白)
	64	1502	長尾鳥図			藤明			藤(白)・明(白)
	65	11237	山水図						藤(白)・明(白)

※●は読み取り不明

花卷市博物館研究紀要

第13号

平成30年3月29日 印刷

平成30年3月31日 発行

発行 花 卷 市 博 物 館

〒025-0014

花卷市高松第26地割8-1

TEL 0198-32-1030

印刷 八 重 櫛 孔 版 社

〒025-0071

花卷市愛宕町8-8

TEL 0198-23-2544

©花卷市教育委員会
